

植民地朝鮮における医学教育史の基礎的研究

——京城帝国大学医化学教室の実態と特質——

Essential research on history of medical education in Colonial Chosen:
 Focused on significant characteristic of Medical Chemistry Study of
 Keijō Imperial University

許 智香*

1章 はじめに

朝鮮半島において最初にして1945年に至るまで唯一の大学だったのが、帝国日本により設立された京城帝国大学（以下、各帝国大学は各帝大と略称する）である。1924年にまず予科がおかれ、1926年になって医学部と法文学部の学部構成で始まった京城帝大は、戦前日本の帝大の歴史からみれば、6番目の帝大、そして最初の植民地大学であった。1940年当時、7校の帝大と、官・公・私立を合わせて40校の大学が設置されていた「内地」に比べれば、貧弱はあるものの、京城帝大の設立をもって朝鮮半島もその高等教育制度上に最高学府を備えるに至ったといえよう¹⁾。

こうした京城帝大のうち、本稿が対象とするのが医化学講座である。同講座が属した京城帝大医学部に関しては、これまで多くの研究がなされてきた。簡単にまとめると、創立当初より「朝鮮特殊ノ疾病、薬物等ノ研究ヲ遂行」する目的で2講座ずつ開設された微生物学講座、薬物学講座、そして「内地」にはなかった衛生学・予防医学講座（1928年設置）と関連して（【表1】）、そこにおける植民地衛生学²⁾や植民地薬物学³⁾の展開に着目した研究、

* 立命館大学衣笠総合研究機構助教

【表 1】1940 年当時帝国大学医学部講座比較

医学部講座	京城帝大 (1930)	東京帝大 (1930)	京都帝大 (1930)	九州帝大 (1930)	東北帝大 (1930)	北海道帝大 (1930)	台北帝大 (1940)
解剖学	3	3	3	3	3	3	2
生理学	2	2	2	2	2	2	2
医化学	1	1 (生化学)	1	1	1	1	1
薬物学	2 (1931 → 薬理学)	2 (薬理学)	2	1	1	1	1 (薬物学)
病理学	2	2 (病理学、 病理解剖学)	2 (病理学、 病理解剖学)	2	2 (病理学、 病理解剖学)	1	2
微生物学	2	1 (微菌学)	1	1 (細菌学)	1 (細菌学)	1 (細菌学)	2 (細菌/微生物)
衛生学・予防医学	1	1 (衛生学)	1 (衛生学)	1 (衛生学)	1 (衛生学)	1 (衛生学)	1 (衛生学)
法医学	1	1	1	1	1	1	1
血清化学	-	1	-	-	-	-	-
基礎医学合計	14	14	13	12	12	11	12
内科学	3	3	3	3	3	3	3
内科物理療法学	-	1	-	-	-	-	-
外科学	2	3	2	2	3	3	2
整形外科	1	1	1	1	0	0	0
産科学、婦人科学	1	2	1	1	1	1 (産婦人科学)	1
皮膚科学、泌尿器科学	1	1 (皮膚科学)	1 (皮膚科学、 微生物学)	2	1 (皮膚科学、 微生物学)	1 (皮膚泌尿器科学)	1
微菌学	-	1	-	-	-	-	-
泌尿器科学	-	1	-	-	-	-	-
眼科学	1	1	1	1	1	1	1
耳鼻咽喉科学	1	1	1	1	1	1	1
小児科学	1	1	1	1	1	1	1
神経科学精神科学	1	1 (精神病学)	1 (精神病学)	1 (精神病学)	1 (精神病学)	1 (精神病学)	1 (精神病学)
内科物理療法学	-	1	-	-	-	-	-
放射線医学	0 (1940 → 1)	1	0	1 (放射線治療学)	0	0	0
歯科学	0	1	0	1 (歯科学、 口腔外科学)	0	0	1
薬学	-	3	-	-	-	-	-
薬品製造学	-	1	-	-	-	-	-
臓器薬品化学	-	1	-	-	-	-	-
臨床医学合計	12	25	12	15	12	12	12
講座総数	26	39	25	27	24	23	24

出典：各帝国大学一覧により作成

京城帝大医学部の創設過程における政治的関係⁴⁾や上記した講座の代表的担当教授陣、今村豊、水島治夫、志賀潔などを中心に彼らの医学史・制度史における位置付けを検討した研究⁵⁾、医学部内の学閥構造、京城帝大の設立を伴う植民地医育のヘゲモニー闘争に注目した研究⁶⁾などがその主たるものである。とくに近年では、当時の評判記⁷⁾、医者たちの回顧録、さらには高位の官僚と京城帝大関係者の間に交わされた書簡などの資料を駆使し⁸⁾、ソウル大学医科大学史をはじめとした既存の研究にも目を配った手堅い成果が発表され、くわえて、これまで注目されてこなかった臨時系講座について、その「医局講座制」としての特徴を検討したもの、京城帝大における博士学位授与の実態を再考察し、その全貌を明らかにした研究なども現れている⁹⁾。これら近年の成果は、京城帝大のみならず、植民地朝鮮の高等教育機関全体における医学史に新たな展望を示すものといえよう。

一方、すでに指摘されているように、植民地朝鮮では京城帝大が設置される以前、京城医学専門学校（以下、京城医専）とその臨床教育機構であった朝鮮総督府医院が官立医育機関として医育を担っていた。総督府医院の院長であった志賀潔が京城帝大医学部の初代学部長に、その他、京城医専教員経験者の55%が京城帝大医学部に移ったように¹⁰⁾、京城帝大「医学部は、事実上、京城医専および総督府医院を継承したもの」¹¹⁾であった。

こうした京城医専との連続性という問題を考えるとき、重要な位置を占める人物として佐藤剛蔵が挙げられる。その著『朝鮮医育史』（1956年）が植民地朝鮮の医学史の必須資料とされてきたことでも知られる人物である。彼は、医学部創設段階から京城帝大に深く関わっており、1925年12月17日付で京城帝大医学部創立委員を命じられたのは、志賀潔、佐藤、そして綿引朝光（1927.6～1933.9 衛生学・予防医学講座）の3人であった。彼らはそれぞれ、志賀が講座担当教授の詮衡を、綿引が世界各国の医学教育制度を、佐藤が予算・経費など経理経営に関する調査を任されたという¹²⁾。だが、これまで佐藤は、専ら京城医専との関係で言及され¹³⁾、京城帝大医化学講座と

の関係については十分知られていない。唯一、医化学の面から佐藤に言及した石田純郎の論稿でも触れられるのはやはり京城医専との関係である¹⁴⁾。

そこで本稿では、佐藤剛蔵という人物に注目し、彼が初代担任教授を務めた京城帝大医化学講座について論じる。佐藤は、1907年に「同仁会直轄平壤同仁医院」へ赴任するため渡韓し、敗戦まで38年間を植民地朝鮮の医育現場の中核にあつて京城帝大の設立と同時に医化学講座担任教授を務めた。この点を踏まえ、本稿では、とくに「研究・指導の場」「人の集合体としての」「教室」¹⁵⁾に注目してみたい。こうした観点から、医化学講座を検討することでこれまで明らかにされてきた京城帝大の「教室」とはまた異なる次元が見えてくるのではないか。このような問題意識にたち、本稿では、京城帝大医化学教室の歴史と教室員の構成、その特徴について明らかにすることを目指す。

2章 論旨の前提：「教室」としての医化学講座

通堂あゆみがすでに指摘したように、「内・外地」を問わず帝国大学の医学部では、「研究・指導の場としての教室」という単位が重視された。医学部の「教室」には、制度上の「教授—助教授—講師—助手—副手」以外にも「大学院学生、専攻生として在籍する医師免許保有者」が教室員として研究を行った¹⁶⁾。また、旧学位令では大学院に進まなくても論文を提出し、教授会で承認されることで博士学位が授与されており、大学院生や制度上で確認される専攻生以外にも研究を行った教室員がいた可能性もある。これらの事例まで勘案すると、通堂の指摘の通り、「それぞれの教室にいつ何名の教室員がいたかを特定することは困難」であろう¹⁷⁾。そこで、各教室において何名の学位取得者が出たかを、京城帝大に提出された主論文の指導教授名によって明らかにしたのが通堂の論稿であり¹⁸⁾、それにより医化学講座の第2代担任であった中村拓のもとで学位を取得した全19名が明らかにされてい

る。対して、佐藤のもとで学位を取得した教室員は見当たらない。詳細については後述するが、ひとまずその理由として考えられるのは、京城帝大が「外地」の高等教育機関とともに学位授与権を付与されたのが1931年以降であることであろう¹⁹⁾。1931年度は佐藤が中村拓と分担に入った時期である。

一方、京城帝大の医化学講座の異動状況を整理した【表2】が示すように、『京城帝国大学一覽（以下、一覽）』や『京城帝国大学学報（以下、学報）』によって公的に把握できる教室員は、副手までである。これは、上記した制度上の「教授—助教授—講師—助手—副手」と一致する。そこで佐藤は1926年度より1935年度まで教授として確認される。では、佐藤体制の講座では、公的に確認される職員や学位授与者以外に、いかなる教室員がいたのであろうか。学位授与権が付与される以前にあたる時期においては、いかなる教室員が佐藤のもとで研究を行っていたのか、この問題を考えることは、研究と指導を目的とした教室の機能を考えるヒントになる。

そこで本稿では、制度上において確認される職位や学位授与者以外に、京城帝大の医化学講座と関わった非公的メンバーを把握するため、一覽と学報をもとに整理した異動状況以外に、医化学教室に関する回顧録を用いたい。まず、当時の教室メンバーについて、1926年5月に副手となった成田不二生は次のようにいう。

当時の（医化学教室の：筆者注）陣容ですが、佐藤教授の下に東大の生化学から赤尾晃さんが助教授として着任され、助手には東大から成島正さん、次いで京大から大島芳生さん、それからまた東大から佐々木貞治郎さんが次々と加わられました。後日、平壤や大邱に医専が誕生されたときにこれらの方々はその教授として赴任されました。これら助手陣の他に、予科教授の津田栄先生が講師として物理学方面の講義や研究を担当され、また京城医専の広川幸三郎教授や後にセブランス医専教授となられた李錫中〔原文のママ。「李錫申」の誤記と思われる。〕博士、龍山

の陸軍から近藤治三郎軍医、同じく安田純夫獣医、歯科医専の岡田正先生、小児科から三谷ヒサ女史などのほかに、第一回生の黒田嘉一郎さんは当初から休暇を利用して教室にこられ、研究を手伝っておられました。黒田さんは卒業後は助手となられ第二代中村拓教授の助教授として立派な業績を上げられ……²⁰⁾。

成田は、助手以上のメンバーと京城医専の広川その他のメンバーをとくに区分せず、佐藤教授体制に関わった人物として認識していることがわかる。後でみるように、これらの人々は研究面において佐藤と共有しており、なかには京城帝大医学部の紀要に研究論文が掲載された事例もみられる。そこで本稿では、成田の回顧録を、京城帝大医化学教室の違う一面を表すものと判断し、以上で紹介されている人物と、制度上確認される構成員（【表2】）を中心に、計25名の医化学教室員の人事および履歴をまとめた（【表3】）。だが、成田の回顧の内容が佐藤体制に偏っている点是否めない。つまり、【表3】には中村のもとで博士学位を取得した一部の人たちが反映されていない（彼らのリストについては【表5】の通堂引用部分を参照）。したがって、中村体制期については、一覧上の副手以上のメンバーに限定したことを断っておく。一方、先にふれた先行研究で石田は、京城帝大以外にも京城医専、大邱医専および平壤医専〔両方とも公立同仁病院（1906～1907）→官立慈恵医院（1910）→4年制の道立医学講習所（1929）→医学専門学校に昇格（1933）〕といった学校ごとに計11名の「医化学者群像」を整理している。そのうち京城帝大に関しては、中村、佐藤（石田は、彼についての詳細は京城医専の方で紹介している）、黒田、赤尾、津田の5人を取り上げたが、石田がまとめたこの5人以外に「西川九蔵」がおり、講師以上の人物は総勢6名であった。また助手と副手が計14名確認され、制度上において確認される医化学教室員は全部で20名である。これに加えて成田の回顧で確認できる広川、近藤、安田、岡田、三谷の5名も医化学教室で研究を行っていた。

【表3】京成帝大医学部医化学教員

石田 (注①)		本籍	生年	任免日付	講座任免事項(注②)	その他、朝鮮における履歴	その他経歴	出身校
②	佐藤 剛蔵	新潟	1880	1926.4.1	京城帝国大学教授兼京 城医学専門学校教授 兼任朝鮮総督府技師	1907.6.7 同仁会直轄平壤 同仁医院長 1910.9.21 大韓医院医務嘱 託	1945.12 京都市 右京区へ引き上 げ 1945 以後芦屋 市の千寿製薬科 学研究部長 1960 没	1906 京成帝大 京都医科大学 卒
				1931.3.26	医化学講座担任免・医化 学講座分担命	1910.10.1 朝鮮総督府医院 医育課長		
				1933.4.6	医化学講座分担免・医化 学講座担任命	1916.4.1 京城医学専門学 校教授		
				1934.5.9	医化学講座担任免・医化 学講座分担命	1920.9 ~ 1921.12 欧米出 張		
				1935.3.30	依頼免兼官	1925.12.17 京成帝大創設 事務嘱託 1926.4.1 京成帝大教授兼 京城医専教授 1927.6.28 京城医専校長事 務取扱兼務 1927.10.7 京城医専校長兼 京成帝大教授 1935 以後京城医専学校長		
①	中村拓	福島	1890	1929.10.1	医学部講師ヲ嘱託ス		1921 伝染病研 究所助手 1921.7 ~ 1929 フランスパリ・パ スツール研究所 に留学、1924 年 ソルボンヌ大学 理学博士 1925 東京帝大 医学博士	1916 第一高卒 1920 東京帝大 医学部卒業
				1931.4.23	任京城帝国大学教授・医 化学講座分担命			
				1933.4.6	在外研究員規定…ニ依 り俸給年額 千七百六十八円ヲ給ス			
				1933.4.6	医化学講座分担免		1929 理化学研 究所嘱託	
				1934.5.9	医化学講座分担命(分担 職務俸九百下賜)		1946.1 福島へ 引き上げ	
				1935.3.31	医化学講座分担免・医化 学講座担任命		1949 横浜市立 大医学部教授 1972 没	
				1938.11.12	仏領院度支那地方ニ於 ケル風土病及蛇毒ニ関 スル調査研究ヲ嘱託ス			
④	赤尾見	大阪	1900	1926.7.19	任助教・医学部勤務		東京帝大研究室 勤務 1938 以後東京 農林水産省蚕糸 試験場嘱託 1944.9 『蚕糸試 験場報告』 (12-1) に「故 とある[戦死]	1925 東京帝大 医学部卒
				1935.7.21	在外研究員任地出発			
				1935.7.26	在外研究員規定…ニ依 り俸給年額千三百六円 ヲ給ス			
				1937.4.19	六箇月間在留延期ヲ命ス			
				1937.12.2	一箇月間在留延期ヲ命ス			
				1938.1.16	在外研究員帰任			
				1938.3.31	依頼免本官			

③	黒田嘉一郎	兵庫(注①)	1905	1930.4.1	医学部副手ヲ命ス		1941.8 北九州の三井山野炭鉱の労働科学研究所に移る	金光中 →1926 京城帝大予科卒
				1935.9.30	医学部講師嘱託		1950 徳島大学医学部教授 ～ 1971	1930 京城帝大医学部卒業
				1938.7.9	任助教授・医学部勤務／講師ヲ解ク		1975 現在徳島文理大学学長	
				1941.7.24	依願免本官			
⑤	津田栄(注②)	三重	1895	1926.4.27	医学部講師ヲ嘱託ス	1924.5.2 任京城帝大予科教授	1920 慶徳義塾大予科教授・医学部講師	第一高卒
				1931.3.31	医学部講師ヲ解ク			1920.7 東京帝大理学部化学科卒
	西川九蔵	京都	1889	1928.3.20	医学部講師嘱託	1917.8.21 任朝鮮總督府中央試験所技手	高工卒後京都ガス工場製造係として4年間勤務	大阪高等工業学校応用化学科卒
				1929.3.31	医学部講師解免	1919.2.4 兼任京城工業専門学校助教授 1919.6.16 任京城工業専門学校教授兼朝鮮總督府中央試験所技師 1922.9.19 無機化学及電気化学研究ノ為万一年六箇月間獨逸国及亜米利加合衆国へ在留ヲ命ス 1923.2.6 免兼官 [19.6.16 任命以後同校教授] 1923.3.15 在外研究員規定…二依り家族手当月額七十四円ヲ給ス 1923.11.21 巡歴手当八百円ヲ給ス 1944.6.30 現在同校教授		1917.8 東北帝大理学部卒
⑩	成島正	山梨	1901	1926.4.22	任助手・医学部勤務	1930 現在平安南道立医学講習所講師	1958 現在甲府市社会保険山梨病院長	1926 京城帝大医学部卒
				1929.3.31	依願免本官	1933.3.17 任平壤医専教授～ 1940	1958 甲府市で成島医院開業	
⑨	佐々木貞次郎	山形	1900	1927.4.8	任助手・医学部勤務	1933.5.27 任朝鮮公立専門学校教授 [朝鮮總督府職員録に「大邱医学専門学校」職員として1943年まで確認される]	1946 山形市で佐々木院開業	1927 京城帝大医学部卒
							1965 没	
	大島芳生	兵庫	1902	1927.4.8	任助手・医学部勤務	1931.6.27 任朝鮮總督府保護技師・大邱刑務所在勤ヲ命ス [朝鮮總督府職員録では保健技師] 1936.3.31 願ニ依り本職ヲ免ス	1939.7 現在武生簡易保健健康相談所 1951.6 現在神戸私立少年保護所所長	第七高
				1931.2.1	依願免本官	1937 現在朝鮮總督府保健技師・平壤刑務所在勤 [1934.6～]		1927 京城帝大医学部卒

⑧	成田不二生	大分		1926.5.10	医学部副手ヲ命ス	1928 現在京城医専医化学教室・医化学教室助教授～1939	1945 以後千寿製薬創立に関わる(注⑥)	第八高 1926 東京帝大農芸化学科卒
				1931.3.31	顧ニ依リ副手ヲ免ス	1940 現在京城医専化学教室・医化学教室生徒主事兼教授～1945 京城薬専非常勤講師(生物化学) 京城女子医専非常勤講師(数学)		
	李錫申	平南	1897	1929.3.31	任助教・医学部勤務ヲ命ス	1921.4～9 東京帝大医学部病理学教室で研究	1944 没	1921 京城医専卒
				1931.4.7	依願免本官	1921.9 ベルリン留学へ出発、1922.3～1927.2 ベルリン大学で生化学研究 1927.3～8 ベルリン市立病院で勤務 1928.2より京城帝大勤務とある(注⑥) 1931.4 セブランス医専教授		
	梁哲煥	咸南		1931.4.10	任助手・医学部勤務ヲ命ス	1935 京城帝大医学部外科学第二講座(担任:小川蕃)～1938.9 現在		京城第一高普 →1927 京城帝大予科卒 1931.3 京城帝大医学部卒
				1932.3.31	依願免本官/医化学ノ授業ヲ囑託ス	1938.9 現在江原道鉄原道立病院外科長		
				1933.5.31	任助手・医学部勤務ヲ命ス/囑託ヲ解ク	1938.12.9 任朝鮮道立医院医官・江原道立長筋勤務		
				1935.6.30	依願免本官			
	江上義男	熊本		1935.4.1	医学部副手ヲ命ス		1944.2 現在満洲国立新京医科大学医化学教室	玉名中 →1931 京城帝大予科卒 1935.3 京城帝大医学部卒
				1938.11.12	医学部副手ヲ命ス			
				1939.7.14	顧ニ依リ副手ヲ免ス			
	西山二郎	茨城		1936～1937	京城帝大医学部助手			佐原中 →1930 京城帝大予科卒 1934.3 京城帝大医学部卒
	鈴木忠夫	愛知		1938-39	京城帝大医学部助手			小牧中 →1932 京城帝大予科卒 1936.3 京城帝大医学部卒
				1939.6.30	依願免本官(助手)			
	平岡尚男(注⑦)	大分		1938.4.1	医学部副手ヲ命ス[氏名前に「(医化学)」]			元山中 →1934 京城帝大予科卒 1938.3 京城帝大医学部卒
				1938.10.10	依願免本官(助手)			
	渡邊龍三	大分		1939～1940	京城帝大医学部助手(一覽)	1937.2 現在京城帝大医学部小児科学教室医学士		
	朝野明夫	長崎		1939.7.18	任助手・医学部勤務ヲ命ス	1942.7 現在京城帝大医学部医化学教室		京城中 →1934 京城帝大予科卒 1938.3 京城帝大医学部卒

	井上乙彦	東京		1941.5.23	医学部副手ヲ命ス〔氏名前に「副手補(医)」〕	1936 現在平安南道立鎮南浦医院医員 1942.5 現在京城帝大医学部医化学教室		1935.3 平壤医専卒〔入学時平壤医講所〕
	岩田奎瑞	咸南		1941.4.1	医学部副手を命ス			
⑥	広川幸三郎	新潟	1896			京城医専助手、講師 1924 現在京城医専医化学嘱託 1926 京城医専助教授～1927 1927 京城医専医化学教授～1945	1922 長岡病院医員 1946 年新潟県三島郡越路町で広川医院開業 1982 没	1920 京城医専卒
	近藤治三郎	愛知	1891			1919.4 三等軍醫として朝鮮派遣 1921.4.1 二等軍醫として騎兵第28連隊所属〔龍山〕 1924.8.20 一等軍醫 1927.9.1 現在騎兵第28連隊所属	1917.12.25 三等軍醫 1928.9.1 現在陸軍科学研究所所員〔一等軍醫〕 1932.8.1 三等軍醫正として陸軍科学研究所所員〔博士〕 1943 現在第6陸軍技術研究所(注⑦)	1917 愛知県立医専卒
	岡田正	愛媛	1890? 1892?			1923 朝鮮總督府医院助手 1930 現在京城齒科医学専門学校在職 1933.8 現在同校補綴学担当～39同校教授まで確認される		1918 東京齒科専門学校卒
	安田純夫	福島	1902			1925.12.2 命朝鮮軍獸医部部員〔二等獸医〕 1928.9.1 現在朝鮮軍獸医部部員	1922.7.22 三等獸医 1925.8.7 二等獸医・野砲兵第2連隊所属〔仙台〕 1929.9.1 現在陸軍夜戰砲兵学校附兼同校教官 1932.1.5 陸軍夜戰砲兵学校附兼同校教官 1939 現在陸軍獸医少佐 1943 現在陸軍軍医学校陸軍獸医中佐	1922 盛岡高等農業学校卒
	三谷ヒサ	大阪				1924 朝鮮總督府医院小児科入局 1929 現在京城帝大医学部小児科教室 1932.3～1935 黄海道沙里院道立病院嘱託同、小児科長 1935 京城帝大医学部医化学教室	1921 東洋内科医院 1935.11.5 没	1920 東京女医専卒(注⑧)

	田中 秀穂	広島	1885		1915 忠清北道清州慈恵医院 医官～1918 1919 黄海道海州慈恵医院 医員～1921 1922 全羅北道全州慈恵医院 医官～1924 1925 全羅北道道立南原醫院 医官～1926 1927 慶尚南道道立馬山醫院 医官～1928 1929～1932 京城帝大医 学部専攻生(医化学・微生 物学) 1933 京城帝大医学部専攻生 (微生物学) 1934 京城帝大医学部専攻 生(内科学)		1910 大阪府立 医学校卒
--	----------	----	------	--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--	-------------------

- (注①) 石田純郎「(一般講演)日韓併合中の朝鮮の医育機関での医化学(生化学)者群像」『医学史学会』(37巻2号、2010年)、59頁に記載されている一連番号を参考まで記載する。
- (注②) 各人物の任命事項については朝鮮総統府官報、京城帝国大学学報、京城帝国大学一覽、朝鮮総督府職員録各号を、履歴および学歴については伝記類、石田論文(同上等)、遺稿の肩書、『帝国大学大観』などを参考にした。
- (注③) 『批判研究博士人物・医科・続篇』(1936)には1928年度より京城帝大勤務とある。
- (注④) 『京城帝国大学予科一覽』には「岡山」となっている。
- (注⑤) 津田栄については、永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』(ゆまに書房、2011)が詳細であるため、詳細は省く。
- (注⑥) 石田純郎「京城医学専門学校の生徒と教授: prosopography (集団履歴調査法的) 的検討」『医学史研究』94号、2012年、10頁。
- (注⑦) 近藤治三郎の履歴については、『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』衛生部、各年度を参考にした。
- (注⑧) 安田純夫の履歴については、『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』獣医部、各年度を参考にした。
- (注⑨) 『東京女子医学専門学校一覽』(1928)、1920年度卒業生に「三谷久子」とある。三谷の生い立ちを記録した『城大小児科雑誌』(1936.3、7号)の追悼文を参考にした。
- (注⑩) 京城帝国大学一覽の卒業生名簿には本籍が一致する「平瀬尚男」が、予科一覽には「平岡尚男」が確認され、前者を誤記と判断した。

ところで、成田のいう「当時」とは、具体的にどの時期に当たるのだろうか。興味深いことに、回顧録を書いた成田自身、1926-27年度の一覽でしか制度上の在籍が確認できない。しかし、彼は27年以降も京城医専にあって1945年まで在職していた。つまり、成田がいう「当時の陣容」とは、初期メンバーだけを指すものではない。【表3】でわかるように、制度の枠外で確認される5人全員の朝鮮での履歴にはばらつきがあり、必ずしも「初期」に偏るものではない。これらの人物については次節でみることにするが、さしあたり、成田の回顧録は、講座編制の外に医学部の「研究・指導の場としての教室」の実態をよく表すものであるといえる。

なお、石田の整理した11名のなかで重複する9名については、石田が付

した一連番号を【表3】に付記した²¹⁾。

そこで本稿では、【表3】の25名を中心に時期ごとにおける医化学教室の特徴について検討したい。その前にまず、京城帝大医化学教室の前史について確認しておく。

3章 京城帝大医学部における医化学講座：前史と設置

京城帝大における医化学講座の前史は、佐藤という人物にとって京城帝大赴任に至るまでの前史でもある。これについて、①医化学講座が最初に置かれた帝国大学（1886年「帝国大学令」）と、②京城医専の状況を簡単にみておく²²⁾。

帝国大学に医化学講座がはじめてできたのは1893年である。ベルリン大学のサルコウスキー（Ernst Leopold Salkowski, 1844～1923）のもとで医化学を研習した隈川宗雄が「病理化学取調嘱託」として帝国大学医科大学に赴任したのは1890年であった。医化学に関する設備および経費がなかった時期に、「授業を開始すること能はず、空く一ケ年を経過したる後、漸く明治24（1891）年1月より生理学教室内の一室に於て、不完全ながら医科第2学年の学生をして尿検査の梗概を実習（以下、引用文のカタカナはひらがなに改める）」させたのが医化学に関する授業の始まりだったという²³⁾。その後、1893年9月の「帝国大学令」の改正の際に導入された講座制により、生理学科目は「生理学講座」および「医化学講座」に分離された。「書籍・器械・器具などの購入費及実験費」は1897年より独立し、1901年には医化学、生理、衛生、薬物各教室の一部が新築される。1910年の韓国併合の頃には20人余の教室員からなる研究体制を築いたが、1923年、関東大地震の際に医化学教室から出火し、同教室と生理学、薬物学および図書館が全焼した²⁴⁾。

一方、京城帝大では、1926年の開校とともに医化学講座が設置されたが、

それ以前においても京城医専には「医化学」が教授科目として設置されていた。また、京城医専における医化学教育も前史をもつ。それは、1907年3月、既存の官立京城医学校と広濟院および大韓赤十字病院が統合される形で始まった大韓医院である。ここが備えた三つの機構、教育部と治療部、衛生部のうち、衛生部はのちに「衛生試験部」となり、それはまた「細菌検査所」と「化学分析所及痘菌造所」に分かれた²⁵⁾。一方、教育部も改正による変遷を経たのち、1910年の併合後には朝鮮総督府医院官制により朝鮮総督府医院附属医学講習所となる。初代院長に陸軍軍医監藤田嗣章が、医育課長に佐藤が就任した。この医学講習所が医科、助産婦科、看護科に組織され、4年制の医科では、2年目に「生理及医化学」を修学するようになる²⁶⁾。この医学講習所が6回目の卒業生を輩出した1916年4月より京城医専となり(勅令80号、朝鮮総督府専門学校官制)、既存の助産婦および看護婦の養成が医院医育課で、医科が京城医専でそれぞれ継承された。京城帝大が開校される前年度にあたる1925年の京城医専一覧を見ると、1年目と2年目に毎週3時間の「医化学(講義、実験及実習)」が課されており、医化学の主任教授に佐藤、助教授に加来天民²⁷⁾、囑託に尹治衡²⁸⁾と広川幸三郎、助手に川合貞雄と西川不二男が職員として配置されていた。

一方、京城帝大医学部における医化学講座は、1926年3月31日、京城帝大の講座類およびその数を最初に公布した勅令47号によって設置された。1926年度には、第3年目から修学する臨床系科目を除く6種の基礎系科目——解剖学3講座、生理学2講座、医化学1講座、薬物学2講座、病理学2講座、微生物学2講座——が置かれている。これらがなされたのは、すでに述べたように、「内地」の東京帝大の医化学教室が関東大震災で全焼してから1931年に医学部1号館が新築されるまでの時期にあたる²⁹⁾。

4章 京城帝大医化学教室員の時期別傾向について：経歴、任命事項、研究および教育

京城帝大医化学講座の全史を通じて、担任教授を務めたのは佐藤剛蔵と、中村拓である。ゆえに医化学教室の特徴を探るためには、まず両名の経歴と研究の特徴をおさえたうえで、それぞれの担任教授を務めた時期ごとの検討を行う必要がある。そこで本章では、佐藤が担任したいわば医化学教室前期と中村が担当した後期に分けて検討していく。また、彼らのもとで教室員がいかなる業績を出していたかを見るため、【表3】で抽出した人物を中心に彼らの論文を整理したのが【表4】である。以下ではこうしたデータを用いつつ、医化学教室の時期ごとにおける特徴をみていく。

【表4】京城帝大医化学教室員の主業績

京城帝国大学医学部紀要に掲載されている医化学教室員の論文（注①）			
成島正	Über die Hydrolyse des Inulins aus Knoblauch durch Salzsäure. [食塩によるニンニクからイヌリンの加水分解について]	11-3	1928.10.10
佐々木貞次郎	Caractères biochimiques des substances composant le corps du parasite vis-à-vis de celles de son hôte. Première Note. Etude sur la graisse en réserve de Balaninus dentipes. [寄生者の身とその寄生者の寄主細胞の実際に関する生物化学的形質比較。最初の考察。Balaninus dentipesの蓄積脂肪についての論考]	3-2	1932.6.30
	Caractères biochimiques des substances composant le corps du parasite vis-à-vis de celle de son hôte. Seconde Note. Courbe titrage électrométrique des extraits de Balaninus dentipes. [寄生者の身とその寄生者の寄主細胞の実際に関する生物化学的形質比較。二つ目の考察。Balaninus dentipes 抽出物の電気滴定曲線]	3-3	1932.9.30
	Etudes biochimiques du parasitisme chez Cuscuta chinensis. [ハマネナシカズラ花における寄生の生物化学的論考]	4-2	1933.6.30
中村拓	Aspect-véritable de la carence ferrique. [鉄欠乏の真相について]	3-2	1932.6.30
	Anémie expérimentale par l'aliment artificiel chimiquement débarrassé de fer. [鉄を化学的に取り除いた人工栄養による貧血症実験]	3-3	1932.9.30
赤尾晃	Recherches biochimiques sur le développement de l'oeuf des vers à soie au cours de l'incubation. [孵化中の蚕種の発展についての生化学検査]	3-2	1932.6.30
	Etudes sur le phénomène de croissance au point de vue des individus chimiques. Expériences sur les ver-à-soie. 1ère note. [化学的個体からみる成長の過程について。蚕種の実験。最初の考察]	3-3	1932.9.30
	Preuve expérimentale sur le rôle du zinc dans la fonction de reproduction. Expériences sur les ver-à-soie (Bombyx mori L.) castrés. [生殖機能における亜鉛の役割に関する実験及び証拠。去勢された蚕種に関する実験]	6-1	1935.4.30

黒田嘉一郎	Micro-dosage de l'eau des liquides biologiques. [体液から作られた液体の微量投与]	4-2	1933.6.30
	Contribution à la connaissance sur la teneur en eau dans le sang humain normal. [平均的人間の血液中の含水量に関する知識への貢献]	5-2	1934.6.30
	Etudes sur la teneur en eau dans le sang de la souris au cours du développement. [成長中の鼠の血液中の含水量に関する研究]	5-2	1934.6.30
	Etudes sur la teneur en eau dans le sang du ver-à-soie (Bombyx mori L.) au cours du développement. [成長中の蚕種の血液中の含水量に関する研究]	5-3	1934.9.30
	Etudes sur la teneur en eau dans le sang de la poule au cours de son développement. [成長中の雌鶏の血液中の含水量に関する研究]	6-1	1935.4.30
	Etudes sur la teneur en eau dans le sang du saumon (Oncorhynchus keta Walbaum) au cours de son développement. [成長中の鮭の血液中の含水量に関する研究]	6-1	1935.4.30
	Simple et rapide micro-dosage de l'eau des liquides biologiques. [体液から作られた液体を容易かつ迅速に微量投与すること]	7-3	1936.10.31
	中村; 黒田	Mécanisme de l'hémolyse au point de vue de la masse active dans le système hétérogène. [多相系における活動物質からみた溶血のメカニズム]	7-1
Sur les facteurs déterminant la vitesse de sédimentation des globules rouges dans un milieu simple chimiquement et physiquement défini. [単純な化学物理学的に設定された環境の中での赤血球の沈降速度に関する決定因子について]		8-2	1937.8.20
La propriété spécifique à l'espèce animale pour la stabilité de la suspension des hématies dans les milieux chimiquement et physiquement définis. [単純な化学物理学的に設定された環境の中での赤血球の特別な形質、その動物類が持つ懸濁安定機能]		8-2	1937.8.20
La cause de l'accélération de la vitesse de sédimentation de suspensions dans les récipients inclinés.		8-3	1937.10.20
	Changement extraordinaire dans la viscosité de la suspension des hématies de diverses espèces animales dans l'eau salée de concentration oligolytique. [様々な動物類の赤血球をオリゴ溶解濃度の塩水に懸濁した際の粘土の異常な変化]	8-4	1937.12.31
	La concentraion oligolytique des hématiès dans les solutions aqueuses de divers sucres. [様々な糖類の水溶液の中での赤血球、そのオリゴ溶解濃度]	9-1	1938.5.20
	Changement extraordinaire dans la viscosité de la suspension des hématies dans la solution de sucre de concentration oligolytique. Comparaison entre les électrolytes et non-électrolytes. [オリゴ分解濃度の糖溶液中の赤血球、その懸濁液の粘度の異常な変化。電解質と非電解質との比較]	9-1	1938.5.20
	La stabilité de la suspension globulaire dans les solutions de suere de concentration variées. [様々な濃度の糖類がみせる水溶液の中での赤血球の懸濁安定度]	9-1	1938.5.20
	L'individualité de la théorie d'osmose au volume des hématies dans lse milieux électrolytiques et non-électolytiques de concentrations variées. [様々な濃度の電解液と非電解液の環境における赤血球の体積に関する浸透理論の独自性]	9-2	1938.6.10
	三谷ひさ	The sub-micro determination of water in biological fluids by desiccation method. [生物学的流体の中に存在する水の乾燥法によるサブマイクロ測定]	7-3
江上義男		L'individualité au point de vue de l'hémolyse et de la répartition d'eau dans le plasma et dans les hématies. [血漿と赤血球における水の分布を溶血の観点からみる]	7-3
	江上; 金錫煥	La viscosité de la suspension des hématies dans l'eau salée et les facteurs qui la déterminent. [塩水の中での赤血球の懸濁粘度とその決定因子]	8-4

	Différence individuelle dans le degré de l'hémolyse et le facteur qui la détermine. [溶血率の個体差とその決定因子]	7-4	1936.12.20
黒田; 海老名	Teneur en eau dans le sang de diverses espèces de poissons. [様々な魚類の血液中含水量]	7-3	1936.10.31
	Teneur en eau dans le sang des diverses espèces d'oiseaux. [様々な鳥類の血液中含水量]	7-3	1936.10.31
	Etudes sur le changement de la teneur en eau dans le sang du cobaye au cours de sa croissance. [成長中のモルモットの血液中含水量の変化に関する研究]	7-3	1936.10.31
	Recherche bio-statistique de la teneur en eau dans le sang sur 1069 hommes normaux adultes. [平均男性 1069 名の血液中含水量の生物統計学的研究]	7-4	1936.12.20
黒田; Li	Comparaison entre le sang du nouveau-né, de la mère et du cordon ombilical en leur teneur en eau. [新生児、母親、臍帯の含水量の比較]	8-1	1937.4.20
黒田; 高楠; Li	Changement extraordinaire de la teneur en eau dans le sang au cours de la vie humaine pré-natale et post-natal. [出生前と出生後の人間の血液中含水量の異常な変化について]	8-1	1937.4.20
梁哲煥	Phénomène somatique du sevrage des enfants vis-à-vis de la teneur en eau dans le sang. [乳離れ子供の身体的現象に関する血液中含水量]	7-1	1936.5.15
	Détermination de la teneur en eau dans le sang sur 1239 garçons et filles, élèves de l'école secondaire. [10歳から18歳までの男女1239名の血液中含水量に関して]	7-3	1936.10.31
	Changement de la teneur en eau dans le sang à travers la vie humaine entière. [生涯を通じての血液中含水量の変化]	8-1	1937.4.20
西山二郎	Signification de la concentration saline oligolytique étudiée par le changement de diamètre des hématies. [赤血球の直径変化から調べるオリゴ分解塩濃度の意義]	7-3	1936.10.31
渡邊龍三	The Distribution of Lipide in the Blood Serum and Red Blood Cells of various Kinds of Animals. [様々な動物の血清と赤血球の中に分布する脂肪について]	10-3	1940.2
京城医学専門学校紀要に掲載されている医化学教室員の主論文 (注②)			
佐藤剛蔵	Ueber das Verhalten der im Eierklar sowie im Dotter vorhandenen Traubenzuckers bei der Bebrütung der Hühnereier. [鶏卵の孵卵に際し、卵白と卵黄に存在する葡萄糖の挙動について。]	不明	1916 (注③)
	Ueber das Verhalten der im Eierklar sowie im Dotter vorhandenen d-Milchsäure bei der Bebrütung der Hühnereier. [鶏卵の孵化に際し、卵白と卵黄に存在する D-乳酸の挙動について]	2	1918
	Ueber die Purinbase im Hühnerharn. [雌鶏の尿にあるプリン塩基について]	2	1918
	Über den Einfluss der Exstirpation der Leber auf die sythetische Vorgänge im Tierkörper. [肝臓の切除による動物体の中の合成現象について]	3	1919
	On the amylase of the Korean Ginseng. [朝鮮人蔘のアミラーゼについて]	4-1	1920
	On the nutritive value of the daily food of prisoners in Chosen. [朝鮮人収監者の常食の栄養価について]	9-3-4	1926
広川幸三郎	朝鮮受刑者食 (離穀食) ヲ試ニ白米食ニ改メタ場合ノ新陳代謝	1-7	1931.11
	朝鮮受刑者食摂取後ノ代謝	2-1	1932.1
	單純食ノ代謝ニ及ボス影響ニ就テ・第一報告・無窒素食	2-2	1932.2
	單純食ノ代謝ニ及ボス影響ニ就テ・第二報告・甜瓜食 [참외]	2-10	1932.10
	(臨床) 仏蘭西フレヌス (Fresnes) 感化院及監獄の食物	3-2	1933.2
	(臨床) ドイツ「モアビット」拘留監の食物	3-10	1933.10
	普通学校 (鮮人小学校) 児童ノ弁当	4-5	1934.5
	(臨床) 垢 [あか]	4-11	1934.11
	(臨床) 新竹 (台湾) 少年刑務所の食物	6-4	1936.4

	蔗糖ノ白鼠生長ニ及ボス影響・第2報	7-8	1937.8
	砂糖ノ白鼠生長ニ及ボス影響・第4報	9-6	1939.6
	砂糖ノ有害作用ヲ Ebios ニテ防止セル小実験	9-11	1939.11
	朝鮮ニ於ケル山間地方住民食ノ栄養学的研究	10-6	1940.6
	朝鮮食ノ栄養学的組成・第一報・下流生活者食	11-1	1941.1
	昭和15年8月1日配給ノ米、櫻麦ニ就キテ	11-4	1942.4
	朝鮮食ノ栄養学的組成・第一報・上流生活者食	11-5	1942.5
	米胚芽ノ栄養的意義	11-8	1941.8
	朝鮮食ノ栄養学的組成・第3報・中流生活者食	11-11	1941.11
	ライ麦(くろむぎ) <i>Secale cereale</i> . L. ノ栄養学的研究	12-1	1942.1
	粳米、玄米、胚芽米、七分搗米及ビ白米ノ貯蔵ニ関スル生化学的研究 ノ其ノ一・家鳩飼養試験	12-6	1942.6
	粳米、玄米、胚芽米、七分搗米及ビ白米ノ貯蔵ニ関スル生化学的研究 ノ其ノ二・胚芽残存量ニ就テ	12-7	1942.7
	自昭和17年1月至同年6月期間ノ配給米ニ就テ	12-8	1942.8
	人造米及ビ麩米ノ成分併ニ麩米朝鮮漬物「苴苴」ヲ添加添加シタル場合 ノ栄養学的研究	12-10	1942.10
	粳米、玄米、胚芽米、七分搗米及ビ白米ノ貯蔵ニ関スル生化学的研究 ノ其ノ三・栄養素ノ変化ニ就テ	13-2	1943.2
	粳米、玄米、胚芽米、七分搗米及ビ白米ノ貯蔵ニ関スル生化学的研究 ノ其ノ四・淘洗液乾固物	13-2	1943.2
	主食物の研究 其ノ一「パン」ニ就テ	13-9	1943.9
広川幸三郎; 伊東忠夫	京城ニ於ケル学校児童弁当ノ代用食品ニ就テ	5-6	1935.6
成田不二生	大豆酒精浸出粕栄養試験	2-12	1932.12
	唐辛種子油ノ理化学的性質	3-9	1933.9
	朝鮮産唐辛子 <i>Capsicum annuum</i> [red pepper] ノ VitaminC ニ就テ	4-3	1934.3
	柑橘類其他二、三ノ果実汁液ノ水素「イオン」濃度及ビ糖分並ニ「ビ タミン」C含有量ニ就テ	4-6	1934.6
	朝鮮産唐辛子 (<i>Capsicum annuum</i> L.) ノ有機酸ニ就テ	4-11	1934.11
	Vitamin A 給源トシテノ蕃椒	7-4	1937.4
	蕃椒果被中ノ有機塩基ニ就テ	7-4	1937.4
成田不二生; 横山京介	つるあらめノ組成ニ就テ [つるあらめ: 呂耳]	2-8	1932.8
成田不二生; 丸岡智	唾液ノ水素「イオン」濃度ト緩衝度及ビ磷酸塩含有量トニ関スル実験	3-5	1933.5
岡田正	大豆「レシチン」が幼「マウス」の生長並其ノ歯牙、骨、肝臓及ビ腎 臓ノ成分ニ及ボス影響ニ就テ	3-5	1933.5
『朝鮮医学会雑誌』に掲載されている医化学教室員の主論文			
赤尾晃	核酸代謝ノ研究 (1) Purin 体ノ Precursor トシテノ Arginin 及ビ Histidin の意義ニ就テ	20-1	1930.1
	核酸代謝ノ研究 (2) 蚕蛹体中含窒素化合物ノ消長ヨリ観タル尿酸ノ 生成ニ就テ	21-6	1931.6
	蚕蛹変態時血液ノ尿酸量、遊離 Anino- 窒素量並血液水素 Ion- 濃度及 ビ其相互関係ニ就テ	21-6	1931.6
	化蛹期ニ於ケル家蚕ノ蛋白質、脂肪並ニ糖質各養素相互ノ態度ニ就テ	21-7	1931.7
黒田嘉一郎	澱粉ノ沃度反応ニ就テ (津田栄共著)	68	1926.10
成島正	大蒜ヨリ得タル「イヌリン」ノ加水分解ニ就テ	75	1927.4
	粟ノ VitaminB ニ就テ (成田不二生共著)	82	1927.11
	「イヌリン」ノ栄養価値 (1) 「イヌリン」の消化ニ就テ	91	1928.8

	「イヌリン」ノ栄養価値(2) 消化管各部ニ於ケル「イヌリン」分解程度ニ就テ、附澱粉トノ比較	91	1928.8
	「イヌリン」ノ栄養価値(3)「イヌリン」ノ体重増加ニ及ボス効果	91	1928.8
	豆粕、雪花菜、薏苡仁〔薏早粿〕及大蒜〔叫늘〕中ノ抗神経炎性 Vitamin ニ就テ(成田不二生共著)	19-12	1929.12
大島芳生	尿中ノ「クレアチニン」及中性硫黄ノ排出量ニ就テ	89	1928.6
	朝鮮人蔘(紅蔘)エキスノ尿中ノ総窒素、硫黄、及ビ「クレアチニン」ノ排出ニ及ボス影響ニ就テ	19-3	1929.3
	朝鮮人蔘「エキス」ノヤツフエー〔Jaffe〕色彩反応及ビ人蔘成分中ノ揮発油ノ生体内ニ於ケル運命ニ就テ	19-8	1929.8
	朝鮮人蔘(白蔘)エキスノ尿中ノ総窒素、硫黄、及ビ「クレアチニン」ノ排出ニ及ボス影響ニ就テ	19-9	1929.9
	朝鮮人蔘ノ一般組成附米国人蔘ノ一般組成ニ就テ(野々村茂子共著)	20-3	1930.3
	朝鮮人蔘ノ一般組成(其ノ二)及ビ無機塩類含有量(野々村茂子共著)	21-4	1931.4
	朝鮮人蔘ノ還元糖及ビ非還元糖ノ量ニ就テ(野々村茂子共著)	21-4	1931.4
	朝鮮人蔘「エキス」ノ尿中配合性 Glukuron 酸排出量ニ及ボス影響	21-4	1931.4
	朝鮮人蔘ノ生体組織内 Glutathion ニ及ボス影響ニ就テ	21-4	1931.4
佐々木貞次郎	「クレアチン」「クレアチニン」ノ生成ニ関スル尿素及ビ Aminosäure ノ反応の機伝、「グリコチアミジン」ノ合成	20-12	1930.12
	「ヒンヒドロ」電極ニ及ボス尿素ノ影響	21-6	1931.6
江上義男	最小溶血濃度ニ於ケル赤血球浮遊液粘度ノ著変、無核赤血球ヲ用ヒ低級脂肪酸塩ニ就イテノ実験	28-2	1938.2
	最小溶血濃度ニ於ケル赤血球浮遊液粘度ノ著変、有核赤血球ヲ用イ低級脂肪酸塩ニ就テノ実験	29-1	1939.1
	有機酸塩水溶液中ニ於ケル赤血球浮遊液ノ粘度ヲ支配スル「イオン」濃度	29-6	1939.6
広川幸三郎	実験のパーロー氏病ノ病因ニ関スル知見	52	1925.6
	受刑者ノ尿ニ就テ	59	1926.1
	受刑者ノ尿ニ就テ	69	1926.11
	受刑者ノ食物ニ就テ	93	1928.10
	夏期同一栄養ニヨリ内鮮人受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ就テノ研究	19-9	1929.9
	冬期同一栄養ニヨリ内鮮人受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ就テノ研究	20-3	1930.3
近藤治三郎	鶏卵ノ孵化ヲ妨ケタル際ニ於ケル糖原質、葡萄糖及残留窒素ノ態度ニ就テ	56	1925.10
	支那料理用ノ家鴨卵(松花且)ノ成分ニ就テ	60	1926.2
	制糖作用ヨリ見タル紅蔘並ニ白蔘ノ経口的投与量ニ就テ	78	1927.7
	癩中毒時ニ於テ「アドレナリン」及ビ「チウレチン」投与が血糖ニ及ボス影響ニ就テ	88	1928.5
安田純夫	馬尿中ニ於ケル還元性物質ニ就テ	89	1928.6
	朝鮮牛ノ肉ノ栄養素ニ就テ	93	1928.10
	馬ノ血糖量並之ニ及ボス労働ノ影響ニ就テ	19-7	1929.7
	馬ノ正常血液中ニ於ケル非蛋白窒素ニ就テ	19-8	1929.8
	馬ノ労働ノ血液 Kreatinin 量ニ及ボス影響ニ就テ	21-6	1931.6
三谷ひさ	穀粒煎汁ニ関スル研究(第一報)	19-11	1929.11
	『満鮮之医界』に掲載されている医化学教室員の主論文		
佐藤剛蔵	高気圧ノ人身ニ及ボス影響ニ就テ	32	1923.11
	酵素ノ合成作用ニ就テ	42	1924.9
	栄養ノ測定	44	1924.11
	保健食品品トシテ魚類ノ価値	70	1927.1
	保健食品品トシテ魚類ノ価値	71	1927.2

	アダリンノ効用	106	1930.12
成島正	朝鮮人夢中「抗神経炎性「ビタミン」ニ就テ(丸岡智共著)	119	1931.2
佐々木貞次郎	朝鮮人夢「エキス」ノ物理化学的性質、静的表面張力ト表面活性ニ就テ	92	1928.11
成田不二生	粟炊糞ニ就テノ実験	94	1929.1
	粟炊糞ニ就テノ実験(2)	95	1929.2
	蒸熱乾燥セル米胚子ノ抗脚気性 Vitamin 含有試験	99	1929.6
	生葉蛋白質ノ研究	101	1929.8
	生葉蛋白質ノ研究	102	1929.9
広川幸三郎	従来ノ分析表ニ見ラレザル食品ノ栄養表量ニ就テ	68	1926.12
	従来ノ分析表ニ見ザル食品ノ栄養表量ニ就テ	89	1928.8
	受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ関スル研究概要	93	1928.12
	受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ関スル研究補遺	98	1929.5
	甜瓜ノ糖含有量ニ就テ	128	1931.11
近藤治三郎	鶏卵蛋白除去法ニ就テ	53	1925.8
	大蒜ノ成分ニ関スル生化学的研究(前編)	65	1926.8
	支那料理用家鴨卵(松花旦)ノ右旋性乳酸ニ就テ	77	1927.8
岡田正	実験的「ビタミン」欠乏症ニ於ケル歯牙及顎骨ノ生化学的研究	107	1930.12
	実験的ビタミン欠乏症ニ於ケル歯牙及顎骨ノ生化学的研究	124	1931.7
安田純夫	馬ノ労働ノ血球数並血球像ニ及ボス影響ニ就テ	105	1929.12
	馬ノ労働ノ血球数並血球像ニ及ボス影響ニ就テ(2)	106	1930.1
	馬ノ正常 Hamoglobin 含有量並之ニ及ボス労働ノ影響ニ就テ	127	1931.10
	馬ノ血漿内炭酸瓦斯含有量ニ関スル研究補遺	137	1932.8
	馬ノ労働ノ血液粘稠度ニ及ボス影響ノ研究	141	1932.12
	馬ノ労働ト赤血球沈降速度トノ関係ニ就テ	144	1933.3
	馬ノ労働ト血清比重トノ関係ニ就テ	145	1933.4
〔朝鮮化学会会報〕に掲載されている医化学教室員の主論文(1931年9号より発行遅延により年度だけ記載する)			
佐藤剛蔵	朝鮮の食物	1-1	1929.11
	食物の化学と保健	2-6	1931.6
	γ -Glucose の生化学的見解	3-1	1932
	Vitamin 化学研究ノ趨勢	4-12	1933
中村拓	鉄の生理的意義に関する二三の実験	1-5	1930.3
	酸、アルカリによる溶血(黒田嘉一郎共著)	11-5	1940
	瓦斯を溶解せる媒体中に於ける溶血(予報)(黒田嘉一郎共著)	11-5	1940
	分子量の増加に従ひ一価アルコール同族列による溶血力が1:3:32:33...である云ふ Führer 及び Neubauer の説に対する注意(黒田嘉一郎共著)	11-5	1940
	赤血球浮游液粘度に及ぼす酸、アルカリの影響(黒田嘉一郎共著)	11-6	1940
	赤血球浮游液の安定度に及ぼす酸、アルカリの影響(黒田嘉一郎共著)	11-6	1940
	赤血球媒体としての電解質及び非電解質の熱力学的作用(黒田嘉一郎共著)	11-7	1940
	赤血球媒体溶質濃度としての酸、アルカリの意義(黒田嘉一郎共著)	11-7	1940
赤尾見	家蚕の生化学的研究、特にその生長に就て	3-5	1932
	〔化学的物質単位〕より観たる生長現象の研究	3-9	1932
	溶血因子としての赤血球と媒間体食塩水との「接触面量」に就いて(黒田嘉一郎共著)	6-9	1935
黒田嘉一郎	生物学的材料を分析する際、其の採取量と粒の大きさと均等度との関係に就いて(予報)(梁智煥; 朝野明夫; 平岡尚男; 市野沢和泉; 渡邊正共著)	5-9	1934
	雞の生長に伴ふ血液水分量の変化に就いて(予報)	5-10	1934

	鮭 (Oncorhynchus keta Walbaum) の生長に伴ふ血液水分量の変化に就いて (予報)	5-10	1934
	家蚕卵発育に伴ふ卵内容液水分量の変化に就いて (予報)	5-10	1934
	血液水分量の局所的差異に就いて (予報)	5-10	1934
津田栄	ドイツに於ける化学教育	1-2	1929.12
	最近の原子構造論より説明せらるる元素の諸性質	1-9	1930.7
	化学教材の選定に就て	8-7	1937
西川九蔵	近時の電気化学と其の工業	2-9	1931
	大化学者の環境性、格並に発見の動機等に就	3-4	1932
	粘土粉末の篩分析の条件、各篩部分中に於ける粗砂分の規則的分布状態並に各部分に於ける粒子の構成的相違に就て	4-4	1933
	化学成分を異にせる物体と液体とか互い濡れ合ふ現象についての最近の科学的見方と其応用例に就て	4-11	1933
	粘土の水分吸着に対する一実験報告	4-7	1933
	粘土類中の硅酸の定量に就いて	5-11	1934
	躍進の日本：昭和八、九年度に於ける重要化学工業現勢の概要	5-12	1934
	ゲル及び之れに関係したる諸現象に対する新知見に就て	6-10	1935
	戦時体制下にある我国の化学教育及び化学工業の大勢	8-10	1937
	我国に於ける電気化学工業の趨勢	9-6	1938
大島芳生	人蔘の話	2-5	1931.5
佐々木貞次郎	寄生物と宿主との間の物質移動に関する二三の実験	3-10	1932
成田不二生	「リオクロム」色素 (Lyochrom) に就て	5-8 (注④)	1933
	食物ホルモンに就て	6-3	1935
	ビタミン化学の最近に於ける進歩	1-3	1930.1
	ビタミン化学の近況	2-10	1931
	ビタミン C 化学の近況	4-6	1933
江上義男	化学者伝：EMIL ERLNMEYER 伝	8-3	1937
	無機中性塩類、脂肪酸塩類等の水溶液の粘度 (東郷直男；宮本潔共著)	9-3	1938
鈴木忠夫	無機中性塩類、脂肪酸塩類等の水溶液の電気伝導度 (渡邊正義共著)	9-3	1938
平岡尚男	赤血球浮游液の粘度に対する「エチル・アルコール」の作用	10-2	1939
	赤血球浮游液の安定度に対する「エチル・アルコール」の作用	10-3	1939
渡邊龍三	赤血球及び血清の緩衝能並に緩衝水素「イオン」濃度	10-9	1939
	各種脊椎動物の血清及赤血球水分量 (李基寧共著)	11-4	1940
	赤血球浮游液の粘度に対する磷酸の媒体濃度としての意義	11-8	1940
	赤血球浮游液「ママ」の粘度に対する磷酸並に炭酸塩の媒体濃度としての作用	11-8	1940
朝野明夫	メチルアルコールの溶血作用と他の溶血因子との関係	8-2	1937
	赤血球浮游液の粘度に対するアムモニア塩の媒体濃度としての作用	11-9	1940
広川幸三郎	運動と酸素	1-10	1930.8
	蛋白極小値に就て	3-1	1932
	パンに就て	4-1	1933
	VitaminA 欠乏症白鼠の体成分に就きて	8-6	1937
	蔗糖の白鼠成長に及ぼす影響 (第3報) 無機質、特に Ca, Mg 及び P に就きて	9-5	1938
岡田正	実験的に「ビタミン」D 欠乏症を起せしめたる幼若「マウス」の消化管内各部に於ける無機塩類に Ca 及び P の態度と歯牙及び骨の Ca, Mg 及び P の消長との関係に就て	5-4	1934
	実験的に VitaminB 欠乏症家鳩の消化管内各部に於ける Ca 及び P が「ママ」態度と骨の夫等成分の消長との関係に就て	5-6	1934
安田純夫	馬の労働の血液乳酸量に及ぼす影響に関する研究	4-4	1933

	馬の血液に於ける酸素抱容体に及ぼす労働の影響に関する研究	4-5	1933
	馬の労働と血液に及ぼす影響に就ての研究	4-7	1933
その他佐藤剛蔵の主論文			
佐藤剛蔵	朝鮮人蔘越幾斯ノ新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ	1920.3	京城医専化学教室新築記念論文
	朝鮮人ノミヲ収容スル監獄ノ食物ニ就テ	1920	国家医学会雑誌
	各種金属塩ノ血液残余素ニ及ボス影響ニ就テ	1920	東京医事新誌
	朝鮮人蔘ノ「アマラーゼ」ニ就テ	1921	京城医専紀要
	半搗米の栄養価値に就て	1927.3	朝鮮
	保健ト栄養	1929	京城薬報
	胚芽米常用者ノ体験	1929	医事公論
	所感	1931.9	米之友
	朝鮮ノ食物	1930	医事公論
	栄養ノ要求量	1930	治療及処方
	脚気ノ予防ニ関シテ	1930	医事公論
	核蛋白体ノ化学並ニ其代謝	1931	日新医学
	朝鮮人の主食物に就ての感想	1932.11	米之友
	朝鮮受刑者食ノ研究、附朝鮮農民ノ主食物ニ就テノ卑見	1934	医業ト社会
	私ドモノ研究カラ見タ朝鮮人蔘	1935.9	日新医学
	食物資源と栄養問題	1938.10	朝鮮
	朝鮮の食物資源と栄養問題	1939.4	栄養の日本
同上	1939.6	糧食研究	
朝鮮の農産食物資源と主食の問題	1939.10	朝鮮	

(備考) 京城帝大医学部および京城医専紀要、朝鮮で発行された主雑誌『朝鮮医学会雑誌』『満鮮之医学界』『朝鮮化学会会報』を調査対象にした。その他、佐藤主論文は、「佐藤校長在職二十五周年記念誌」(『京城医学専門学校紀要・佐藤校長在職二十五周年記念誌』第5巻10・11・12号、1935年12月)の目録を参考に補充した。なお、京城帝大医学部および京城医専紀要はその刊行形態が複雑である(以下に注記)。これらの点については、永島広紀、通堂あゆみ、新里瑠璃子先生に教えを受けた。記して感謝を表する。なお、京城帝大医学部刊行物を整理したものに、通堂あゆみ「付録3・植民地大学文献目録 朝鮮編」(前掲『帝国日本と植民地大学』収録)を参照されたい。

(注①) 1928年より1929年まで(第11～12巻)はActa medicinalia in Keijpで京城医専と合同で紀要が綴られた。1930年よりKeijo [10巻よりKeizyo] journal of medicineという名称で独立し、第1巻から第13巻(1943)まで刊行されている。

(注②) 1917年(1巻)より1927年(10巻)まで京城医専紀要が発行された。京城帝大医学部の設置により1928年から1929年までは(注①)で言及した合同紀要が出される。1931年に京城医専紀要として独立し1943年(第13巻)まで刊行される。

(注③) 『京城医学専門学校紀要・佐藤校長在職二十五周年記念誌』(第5巻10・11・12号、1935年12月)の目録によるが、京城医専紀要は1917年より刊行されているので不正確な記載と思われる。

(注④) 4-8の誤記?

※ [] は筆者による

【表5】京城帝大医化学教室員の博士論文 [●が中村下取得]

氏名	主論本のタイトル	学位授与日	授与機関
佐藤剛蔵	朝鮮人參越幾斯ノ新陳代謝ニ及ホス影響ニ就テ	1922.1.14	京都帝大
中村拓	鉄飢餓ノ真意義ニ就テ (仏文)	1925 (注)	東京帝大
赤尾晃●	化学的物質単位ヨリ觀タル生長現象ノ研究 (仏文)	1933.3.30	京城帝大
黒田嘉一郎●	生物学的液体ノ水分微量定量法其生物学的檢索	1935.2.6	京城帝大
成島正	受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ関スル研究	1931.8.8	京都帝大
佐々木貞次郎●	宿主ニ対スル寄生物体成分ノ生化学的性質 (仏文)	1933.4.19	京城帝大
大島芳生	朝鮮受刑者ノ尿中含窒素成分ノ量的分布並之ニ及ボス諸因子ノ影響	1932.8.31	京都帝大
成田不二生	朝鮮産蕃椒ノ生化学的研究	1940.4.24	京都帝大
李錫申	朝鮮人ノ習慣食ニ就テノ研究	1932.2.24	京都帝大
梁哲煥●	人類ノ生涯ニ於ケル血液水分含量ノ變動 (仏文)	1938.11.14	京城帝大
江上義男●	中性塩類水溶液中デノ赤血球浮游液ノ粘度	1939.11.9	京城帝大
渡邊龍三●	血液脂質ヨリ見タル環境ノ体成分ニ及ボス影響	1941.8.7	京城帝大
朝野明夫●	赤血球媒体ノ熱力学的ナラビニ電気的現象	1943.6.19	京城帝大
井上乙彦●	赤血球浮游液ノ粘度ニ対スル媒体濃度トシテノ重金屬塩ノ研究 (赤血球媒体トシテノカオチンノ意義)	1944.6.12	京城帝大
広川幸三郎	朝鮮ニ於ケル受刑者ノ栄養並新陳代謝ニ関スル研究	1928.1.13	京都帝大
近藤治三郎	朝鮮人蔘 (白蔘) ノ制糖作用ニ就テノ研究、朝鮮人蔘 (紅蔘) ノ制糖作用に就テの研究	1927.11.30	京都帝大
岡田正	各種ビタミン欠乏時及ビビタミン D 過剰時ニ於ケル歯牙及ビ骨ノ無機成分ノ態度ニ就テ	1935.2.23	京都帝大
安田純夫	馬ノ労働ノ血液ニ及ボス影響ニ就イテノ研究	1935.1.18	京都帝大
田中秀穂	細菌体含水炭素抗原並ニ細菌体化学特異抗原ニ関スル研究	1934.8.3	京城帝大
※以下は前掲、通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究——日本統治下朝鮮における帝国大学の制度・組織とその展開——」第5章表1から引用			
三宅二一●	核ノ分離並ニソノ亜鉛含量 (仏文)	1934.2.14	京城帝大
古賀明恭●	核分離並ソノ亜鉛含量問題ニ関スル最近ノ研究 (仏文)	1934.12.5	京城帝大
松崎(黒木)七美●	異ル濃度ノ食塩水中ニ於ケル赤血球ノ最小溶解濃度ト溶血産物ノ性質	1936.3.11	京城帝大
薬師寺直宜●	核分離機構並ニ分離核ノ化学的及ビ物理的研究	1937.8.16	京城帝大
蝦名六郎●	種々ノ動物ノ無核並ニ有核赤血球ニ対スル尿素溶血現象ノ量的研究	1938.8.2	京城帝大
東郷直男●	赤血球浮游液ノ安定度	1939.11.9	京城帝大
金錫煥●	中性塩類水溶液中ニ於ケル赤血球浮游液ノ粘度ノ著変	1939.11.9	京城帝大
高築秀男●	中性塩類水溶液中ニ於ケル赤血球ノ溶血機構ニ関スル研究	1939.11.9	京城帝大
上原芳孝●	枸橼酸曹達加血液ノ物理化学的研究	1941.8.7	京城帝大
藤本真●	溶血性物質ニヨル溶血機構	1942.6.10	京城帝大
大河原貞恭●	人類ノ生涯ニオケル血液水分量ノ變動	1945.5.11	京城帝大

(注) 月日不明 (『日本医籍録』1935年版、73頁)

1 節 医化学教室前期：佐藤剛蔵と栄養化学研究

佐藤剛蔵は1926年に医化学講座の担任教授となり、依頼免兼官となる1935年3月まで医化学教室を取り仕切った。1931年には中村拓が新たな担任教授として赴任し、以降1932年度までは佐藤と分担する形で在職している。すでに述べたように、佐藤は韓半島における近代的医育の事実上の始まりともいべき同仁会の朝鮮派遣事業によって1907年6月に渡韓した。いうまでもなくこれは韓国併合以前であり、いわば彼は大韓医院期から京城医専期に至る全過程、そして京城帝大の発足と、その後の京城医専との関係を通じ一貫して大きな位置を占めていたといえる。またこの時期における活動は、彼の『朝鮮医育史』（1956）にも詳しく記された。ただし、ここでは、彼が京城帝大の医化学教室においていかなる位置にいたのかに話を絞り、研究上の特色、そして彼が育てた教室員について整理したい。

佐藤が医化学方面での研究をはじめた時期は、その渡韓以後にあたりと考えられる。佐藤は1902年に京都帝大京都医科大学（福岡医科大学との両立時代）に入学し、1906年に学部を卒業すると同校の教室に所属することなく翌年には渡韓しているからである。当時、京都医科大学の医化学講座担任は、京都帝大医化学講座の初代教授・荒木寅三郎³⁰⁾であった。しかし、学部時代の佐藤が荒木から影響を受けた痕跡は見当たらない。対して、佐藤が恩師と言及したのが、当時、京都医科大学の薬物学第一講座担任を務めていた森嶋庫太である³¹⁾。その他に佐藤が「世話になった」と言及した人物として、京都医科大学・外科第二講座担任および附属医院長だった伊藤準三と、外科第一講座担任の猪子止戈之助（1860～1944）が挙げられる³²⁾。

一方、佐藤の医化学方面における初期論文は、管見の限り1917年から1921年までの間に発表された諸論文である（【表4】参照）。これらの論文は、1922年に学位審査のために出された主論文である「朝鮮人參越幾斯ノ新陳代謝ニ及ホス影響ニ就テ」の「参考論文」と一致することから³³⁾、博士学位論文を準備する過程で書かれたものと思われる³⁴⁾。佐藤は、勅令344号

(1898)の学位令により「大学院に入り定規の試験を経たる者と同等以上の学力ありと認め」られ、学位を取得した。【表4】でわかるように、その後には書かれた論文も朝鮮の食物を研究素材にその栄養を化学的に分析し、病気との関連や予防策を指摘するものであった。

そのなかでも特記すべきものに、「雑穀食」を栄養上の見地から奨励した諸文章がある。彼がこうした研究に取り組んだ背景には二つの契機があった。一つは博士学位を取得した翌年にあたる1923年頃より総督府の依頼を受けて朝鮮の刑務所の食物を調査したことである。もう一つは、1929年には1927年度の朝鮮総督府統計年報に基づき、朝鮮人の年間食物消費量および一人あたり一日分の消費量の平均、カロリーおよび蛋白質質量などを調査した³⁵⁾。こうした経験から導かれた結論について佐藤は次のようにいう。

私は大正十二(1923)年頃から総督府の依頼を受け朝鮮の刑務所の食物に就て調査研究して居るが主食物は粟(主に満洲産:原文のママ)が主体で大豆は少なくとも三割、特に米一割位を加へて居る。大体こういう雑穀食の型はどこから出発したものかと探索して見たが、たまたま朝鮮の食物の消費高を調べて見たところ粟一年一人当りの消費高は内地では二升なるに朝鮮では四斗計りで其差三斗八升も多くあることに気付いたのであつた。又粟以外の雑穀類も内地に比し朝鮮では一年一人当り八升計り多く消費して居るのであつた。然るに米は内地で一年一人当り一石一斗なるに朝鮮では六斗で約五斗り消費高が少ないことを知つた³⁶⁾。

彼はさらに地域別に粟の消費量の違いを調査し、中央である京畿道に近づくほど粟の消費量が少なくなっており、「雑穀食は栄養上からは合理的で又経済的であるがだんだん白米食をするやうになつてこの旧来の型が無くなつて行くのは誠に遺憾のことだ」と述べる³⁷⁾。佐藤は、「刑務所食を研究調

査して居つたことがたまたま朝鮮人の八割を占むる農民の食物を研究して居つたことであつた」と、「刑務所食」の型が8割をなす朝鮮農民の食物からきたとし、先に述べた調査で自身の研究的方向性に「決心」がついたと振り返っている³⁸⁾。

それではこうした研究を行っていた佐藤のもと、教室員たちはどのような研究を行っていたのだろうか。これを考える際には、「佐藤博士指導ノ下ニ成サレシ業績」という記事が参考になる³⁹⁾。そこに記された人名を順番に取りだすと、赤尾晃、広川幸三郎、近藤治三郎、成島正、成田不二生、岡田正、大島芳生、李錫申、佐々木貞次郎、田中秀穂（志賀潔城大教授ト共同指導：原文のママ）、安田純夫といった人々が挙げられる。【表2】と合わせてみると、傍線で示した人たちが制度上確認できる医化学講座の初期メンバーであることがわかる。京城医専を卒業したのちに東京帝大とベルリン大学で研究した李錫申まで含むと、6人全員が「内地」の帝大を卒業、あるいは帝大で研究をした経歴をもつ。まず、赤尾（1925年卒）、成島、成田（それぞれ1926年卒）はみな東京帝大を卒業しており、京城帝大医化学講座初年度のメンバーとしてそれぞれ助教授、助手、副手に赴任した。また、1927年度から助手に赴任し、1931年度以降は大邱と平壤の刑務所保健技師としてその名前が確認される大島は1927年に京都帝大を卒業した。李は、1921年に京城医専を卒業した直後に東京帝大病理学教室で半年間研究を行っている⁴⁰⁾。また彼は、1922年3月から1927年2月までベルリン大学の医化学教室で研究し、博士号を取得したとされる⁴¹⁾。帰国後は佐藤のもとで研究をしたのちに京都帝大で学位を取得している。最後に、佐々木は1927年度に東京帝大を卒業している。佐々木と大島は、出身大学は違うが、それぞれ1927年度に帝大を卒業した直後、同じく1927年4月8日付で医学部助手に任命されている⁴²⁾。

一方で、制度上は確認しにくいものの、実質的に京城帝大医化学教室を構成していた人物として（傍線外）、広川幸三郎、近藤治三郎、岡田正、田中

秀穂、安田純夫といった人々がいる。彼ら全員の共通点は、京城帝大が設立される以前から京城にいた、いわゆる「在来種」⁴³⁾であり、かつ非帝大出身者だったということである。つまり京城帝大の医化学教室は、制度面においては、講座開設以前から佐藤のもとで研究していた非帝大出身者とは別個に、帝大出身者を制度上の構成員として充員したことになる。制度を超えた「教室」という側面からみると、講座開設以前の非帝大出身者に、帝大出身者が加える形で教室メンバーが構成されたともいえる⁴⁴⁾。

以上に挙げた教室員たちは、研究面において一つの集団を形成していた。多少長いが、当時の教室の雰囲気をよく表すものとして大島と成田の回想を引用しておく。

朝鮮の行刑衛生上特に其の栄養方面の研究は佐藤剛蔵博士を始め其の指導の許に広川幸三郎博士、成田不二生学士、成島正博士、李錫申博士及び小生（大島芳生：筆者注）等に依り十数年に亘り続行せられ、其の研究成績は既に全部にて十数回に亘り発表せられ、其の方面の世界的事業と思ふ、之れ朝鮮行刑上内地より優れるものと信ず、朝鮮受刑者の食物は一人一人其の価九銭以内、内地のふ副食物代に及ぼず、而かも充分なる事を立証し更に病気に対する抵抗力性慾抑制等の方面に研究は進められてきておる⁴⁵⁾。

助手の成島さんはニンニクの炭水化物イヌリンを抽出されてその加水分解の研究、また小生（成田：筆者注）と共同でこのニンニクはじめいろいろの朝鮮の食品中のビタミンの研究をして、中でもニンニク中のビタミン B₁の研究には白米病に罹ったハトにエキスを与えて特有な痙攣発作の活癒実験や、基礎飼料で飼育した白鼠にエキスを与えての生長曲線などで含量測定をしました。当時化学的に未だ何も正体の判っていないビタミンのこととて数字的には十分にでていませんが、後日アリナミ

ン研究などの先鞭をつけたものとして楽しい想出になっています。その後小生は医専の方に移って引続き朝鮮の食品、とくに蕃椒(とうがらし: 筆者注)の生化学的研究に進みました。城大医化学教室開設の基礎を佐藤先生と共に築いて来られた広川先生は一時私共と一緒にこの教室で研究をされましたが、その朝鮮人受刑者の栄養と代謝の研究は偉大なる労作でその後、成島さん、大島さん、李博士らもこの方面の仕事を引継がれ物質代謝、エネルギー代謝の貴重な業績を残されております⁴⁶⁾。

具体的な研究業績については【表4】を参照されたい。彼らの研究傾向が、脚気病論争以後の「栄養化学」の進歩と軌を一にするのも確かであろう⁴⁷⁾。また、これらの研究が戦時期における食物資源対策、そして戦時の栄養対策に結びついていったことも看過できない。1930年代後半より書かれた佐藤の諸論文は、とくに「雑穀食」が、日清戦争を始めとした日本の戦力といかなる関係におかれていたのかを史的に整理しながら「雑穀食」の利点を強調している⁴⁸⁾。そして「長い間内地では脚気と白米との問題ではひどく悩んで来たがその二の舞をば新興の朝鮮では演ぜないやうに朝鮮に居る衛生関係者は白米常食廃止、胚芽米奨励をこれまで度々強調して来た」という⁴⁹⁾。また、同教室メンバーである李錫申も1939年の新聞紙面において「近年、栄養化学の進歩により、食物の配合が大きく注目されるようになった」とし、主要穀物の栄養含有量を具体的に示しながら雑穀食を奨励する⁵⁰⁾。この記事は、「朝鮮は日本の大陸進出において最も重要な拠点であり、いかなる災害が起ころうとしても朝鮮は朝鮮が持っているすべてのものを一致協力し、日本の要求に応じ、全てを克服すべきである」と訴える編集部の紹介文とともに掲載されており、こうしたことからその位置づけが理解できよう。また、成田の「半島生活と唐辛子」という文章は、唐辛子の半島への伝来史を紹介しながら唐辛子の栄養的価値を述べた文章であるが、食糧のもつ栄養的価値を最大生かすという「決戦下」の文脈から自由ではなかった⁵¹⁾。

以上のように佐藤体制では、佐藤自身を筆頭に栄養化学に力を入れていた。それは同時代の栄養状況やこれに対する行政の取り組み（それは時期によって戦時色も含む）とも深く関わるものだったといえよう。

2 節 医化学教室後期：中村拓と同校出身助手たち

中村拓は1929年10月1日付で京城帝大医学部講師に赴任している。1931年4月に教授となり、1935年3月、佐藤の兼任解除まで彼と分担する形で在職した。この間中村は1933年4月から1年にわたり在外研究員としてロンドンとパリに留学している。1934年には佐藤と講座分担をなし、1935年度より1945年8月まで京城帝大の医化学講座の担任教授として教室の教育を担った。一方、中村については、当時より古地図研究者としても知られていた⁵²⁾。

さて、医化学講座における中村は「薬物学第一講座担任の大澤勝教授、医化学の中村拓教授、それに病理学担任の小杉虎一教授のトリオ」といわれていた⁵³⁾。通堂が明らかにしているように、中村のもとで19名もの学位取得者が輩出されたことも、彼の影響力と無関係ではないだろう。そこで以下では、これまで知られていなかった中村の経歴と京城滞在時期に注目し、1935年以後、すなわち後期における医化学教室について探ってみる。

1890年、福島県梁川町に大工の次男として生まれた中村は、いわゆる正規の教育課程を経た医学部生ではなかった。尋常小学校を出たのちに中学は検定試験で合格し、東京高等商業学校（一橋大学の前身）に入るが、進路を転じ、再び一高に受験、その後、東京帝大の医学部に進学する。学部生時代には医学者パスツールから大きな影響を受けて、将来のフランス留学を決心したという⁵⁴⁾。東京帝大を1920年12月に卒業した直後に伝染病研究所に入所、当時の伝染病研究所の所長は長与又郎であった。長与は中村に京城帝大の赴任を勧めた人物でもある。中村は、入所半年後にあたる1921年7月にフランス、パリに向かい、1929年まで足かけ9年の留學生活を送った。こ

の間、東京帝大在学中にフランス語を教わったマダム・ジャクレー（ジャンヌ）と結婚し（1926年⁵⁵⁾、彼女とは京城での生活も共にすることになる。ちなみに京城では、ジャンヌ以外に中村の甥二人が同居していた。その一人が、中村の経済的援助者であった兄・徳太郎の次男・中村弥で、彼は小学校5年の時に叔父に引き取られ、敗戦まで京城で育つ。京城帝大医学部を1943年に卒業した⁵⁶⁾。

すでに述べたように、中村に京城帝大行きを勧めたのは伝染病研究所の所長・長与又郎であった。小伝によると、中村は学部の中からフランスと南米での生活を夢見ていたという。1929年に書かれた中村のメモーに「ブラジル行きを申し出て、長与不同意」とあり⁵⁷⁾、一度は学生時代の夢をかなえようとしたようである。しかし、長与に反対された彼は結局京城帝大に講師として赴任することになる。

中村が残した論文数はそれほど多くない。【表4】でわかるように、京城帝大紀要に発表した仏文論文1編があり⁵⁸⁾、これは彼がフランス留学時期に東京帝大に提出した博士論文のタイトルと酷似している。その他は、鉄の生化学的研究、そして一番弟子であった黒田嘉一郎との共著論文が多い。こうした彼の研究の特徴について黒田の回顧録を引用しておく。

中村先生は、パリ・パスツール研究所でベルトラン教授の下で、鉄、亜鉛、ニッケル、コバルトの微量重金属の生化学的研究をしていたので、初期の研究はその延長とも見るべきものであった。有核赤血球を溶血させ、細胞核を分離する方法を考案し、細胞内の亜鉛が核に偏在することを明らかにした。家蚕の発育に伴う亜鉛の変動を調べ、亜鉛は生殖腺に多く存在し、亜鉛と生殖との関係を調べ、その生物学的意義を把握した⁵⁹⁾。

黒田によれば、生物の成長を体重や体長などの変動で捉えてきた既存研究

に対し、中村は、その変動要因を化学的に細分し、「元素、その他の「化学的物質単位」の変動」によって生物の発育を説明した点に彼における学術的特徴があるという⁶⁰⁾。

それでは、こうした中村に率いられた時期、医化学教室はどのような特徴を有したのであるだろうか。まず佐藤が赴任した時期との違いとしては、4年制だった京城帝大医学部が1930年度に第一回の卒業生を輩出して以来、医化学教室では助手のほとんどを同校出身者で埋めることになった点がある。その最初の例が上で述べた黒田嘉一郎であった。黒田は「内地」より「外地」の帝大に進学したという経路を歩んでおり、そのきっかけについて次のように述べている。「(1925年)春、岡山県私立金光中学校を卒業した私は、ある日、朝鮮の京城に帝国大学が新設され医科があり、大学予科の受験資格は中学卒業ではあるが、修業年限が二年であるという新聞記事をみた。前年、中学四年修了で高校の受験に失敗した私は、ただ修業年限二年にひかれて規則書を取り寄せた。封筒には「朝鮮帝国大学予科開設事務所」と大きな活字が刷っており、何か力強いものを感じた」⁶¹⁾。一覧には記載がないが、学報によると、黒田は卒業と同時に1930年4月1日付で医化学講座の助手となり、1935年2月には母校で博士学位を取得、同年9月には同講師、1938年には助教授となる。上で取り上げた中村との共著論文は、中村教授—黒田助教授の体制の下で出された業績であった。その後、1941年4月頃に九州帝大の水島治夫⁶²⁾の推薦を受けて北九州の三井山野鉦山の労働科学研究所に移ることになり「内地」に戻った。

一方、黒田以後の同校出身助手を時期順に見ておくと、まず、黒田の一年後輩で1931年4月10日に助手に任命された人が梁哲煥である。彼は1935年まで医化学講座の講師および助手として勤務したのちに同年度より外科第二講座に移り⁶³⁾博士論文を出している。その後には江原道各地の道立病院で勤務していたことが1940年度まで確認できる。そして、1935年度より助教授・赤尾が在外研究に入ることで、事実上、中村—黒田体制となった時

期に助手として赴任したのが、江上義男、西山二郎、鈴木忠夫、平岡尚男、渡邊龍三、朝野明夫、井上乙彦、岩田奎瑞といった人々である。彼らは出身校が確認できない渡邊と岩田、そして1935年に平壤医専を卒業した井上を除く5人が京城帝大医学部の卒業生であった。また、黒田をはじめ、博士学位取得が確認される教室員全員が京城帝大で学位を取得している。京城帝大が学位授与権をもつようになったのは1931年からであるため、時期が後ろにいくにつれて母校博士取得率が高くなるのも自然なことといえようが、それにしても大島、成田、李錫申など、佐藤のもとで研究を行った教室員は1931年以後においても他大学で学位を取得しており、こうした点にも中村体制の特徴を指摘できよう。総じていえば、京城帝大の医化学教室においては、佐藤体制下では、京城帝大が創立される前より朝鮮に住んでいた「在来種」の教室員も含め、「内地」で学位を取得する傾向が強かった一方、1935年以後の中村体制では、学位取得者全員が京城帝大で学位を取得していたことがわかる。

3節 「在来種」メンバーたちについて

ここまで、佐藤・中村時代それぞれにおける医化学教室について検討してきた。ところで、佐藤体制期の研究室に特徴を与えたのが、京城帝大医学部が設立される以前から朝鮮に在住し、教室員に加わったいわゆる「在来種」たちである。すでに述べたように、彼らは非帝大出身者がほとんどで、京城帝大医学部が卒業生を輩出する以前において佐藤のもとで研究を行っていたケースが多かった。本節では、以上で論じきれなかった講師二人を含め、彼らについて確認しておく。

「在来種」中、一覧で確認できる講師として、津田栄、西川九蔵が挙げられる。講師は官制上の職員ではなく⁶⁴⁾、「囑託」の形でおかれた職位であった。津田は1926年4月に、西川は1928年3月に講師囑託となっている。津田についてはすでに先行研究⁶⁵⁾で詳しく論じられているので詳細はそち

らに譲るが、京城帝大医学部の第一回卒業生であった黒田が「予科に入学して、実験を挿入した津田先生の化学の講義に魅せられて、物理学から化学へ宗旨替えをした」と述べているように、津田は、京城帝大の予科教授として1924年度より赴任していた。1926年の医学部設立と同時に医学部の兼任講師となり、物理学、化学方面を教えたとされる。一方、西川は「内地」で高等工業学校を卒業したのちに東北帝大理学部に進学、1917年に卒業した直後に渡韓している。そのきっかけについては不明であるが、朝鮮総督府中央試験所の技手として赴任であった。1919年には京城工業専門学校⁶⁶⁾の助教授に任命され、その後は兼任を経て1944年まで京城工專教授としてその経歴が確認される。医化学教室の講師としての兼任期間も短く、教員として研究を行った痕跡は見当たらない。

次に、京城帝大医学部の「専攻生」⁶⁷⁾として医化学教室の在学が確認される計4名のなか、学位は他大学あるいは他講座で取得しているものの、佐藤のもとで業績を出している人に、「近藤治三郎」と「田中秀穂」がある。田中は「志賀潔城大教授ト共同指導」とあり、1929年から1932年まで「医化学・微生物学」の専攻生として確認され、1933年度には「微生物学」、1934年度には「内科学」に専攻が変わっている。彼も在朝期間が長く、1915年から植民地朝鮮の慈恵医院と道立病院で医官として勤務した経歴が確認される。まさに「内地」の医学校を卒業（1910年大阪府立医学校卒）した医師免許保有者が「外地」で勤務する傍ら、学位取得のために京城帝大を經由した一例であろう。

もう一人、初年度の専攻生として確認される近藤治三郎については、安田純夫とともに軍医という側面から紹介しておきたい。近藤と安田が軍属であったことは、それぞれ1917年と1922年度より確認される。渡韓時期だが、近藤は、1919年4月に「第5師団歩兵第71連隊・三等軍医」として朝鮮に渡ったことが確認され⁶⁸⁾、その後、1921年4月1日付で二等軍医、1924年8月に一等軍医に昇進し、1927年秋以降から1928年の間に「内地」に

戻るまで約9年を朝鮮で過ごした。1927年11月には京都帝大で学位を取得している。『朝鮮医学会雑誌』『満鮮之医界』『日本薬物学雑誌』に研究論文を発表していた時期も1925年から1927年に集中している(【表4】参照)。また、安田純夫は、1925年12月に朝鮮軍配属を命じられ渡韓しており、その後の軍属としての経歴をたどってみると、1928年から1929年の間に「内地」に戻ったのではないかと思われる⁶⁹⁾。安田も京都帝大で1935年に博士学位を取得している。成田の回顧で述べられているように、二人が同時期に「龍山の陸軍から」医化学教室の方に通っていたのは確かであろうが、时期的にみれば、近藤は京城帝大が創立される以前から京城医専にあった佐藤のもとで研究をしていたと推測される。この二人は、軍医や軍獣医として朝鮮軍に配属されたのちに自分のキャリアアップを目的に京城帝大医学部で研究を行い、学位を取得した例であろう。

一方、京城歯科医学専門学校(1922年京城歯科医学校設立、1929年に専門学校へ昇格。以下、京城歯医専)で1939年まで在職が確認できるのが岡田正である⁷⁰⁾。彼は1918年に東京歯科専門学校を卒業し、少なくとも1923年以前には渡韓している。彼の赴任時期や職位などについては、京城歯医専に関する資料がないため不明であるが、彼も京城帝大が設立される以前に朝鮮総督府医院助手として朝鮮に渡ったのち、自身の専攻を生かして仕事と研究活動を両立、継続していたと思われる。1935年に京都帝大で博士学位を取得している。

最後に、制度上確認できない教室員のなかで、成田の回顧では「小児科から」きたと紹介されている「三谷ひさ」について確認しておきたい。これまで戦前日本の帝国大学における女学生入学の制度的前提や実際例については先行研究においても注目されてきた⁷¹⁾。三谷の場合、1920年に東京女子医学専門学校を卒業しているので、帝国大学の女学生入学の例ではないが、女子医専を卒業した医師免許保有者として本業に従事しながら帝大医学部の教室に通った例として、その経歴が注目される。【表4】からわかるよう

に、彼女は京城帝大医学部紀要においても論文を発表しており（死後、1936年10月号）、1920年代後半には京城帝大教授たちと学会活動を行なっている⁷²⁾。一方、三谷について公的に確認できる人事は、1933年度より1934年度まで黄海道沙里院道立病院で嘱託として勤務したことである⁷³⁾。ところが、彼女は1924年より朝鮮総督府医院小児科に在職していたことが確認される。朝鮮で生活するに至った正確な時期やきっかけについては不明であるが、1924年9月に朝鮮総督府医院小児科に入局し、1932年3月から先述した黄海道沙里院道立病院で約2年間勤務した。道立病院に赴任するまでに出された業績の内容から、朝鮮総督府医院に勤務した時に医化学方面で研究を始めたものと推測される⁷⁴⁾。1935年には道立病院を退職し京城帝大の医化学教室で研究を行っていたという。だがその後、1935年10月19日、小児科地方会の後に発熱、岩井内科に入院するも、同年11月5日に亡くなった。岩井内科で診断された病名は「腸チフス」であった⁷⁵⁾。

また、三谷が研究に取り組む様子について横山久衛（1934～38小児科講座助手）は「最近では生化学中村教授の元で日曜も休まず夏休みも取らず孜孜として勉められ吾教室最初の女医学博士たるべき日も近づいていたのだ、御尊母の話によると医化学教室で毎日10時間も立つてゐるので帰宅の際は全く足が腫れてゐるのが一晩寝んで朝になると元にかへるので再び元気を出して教室に通つてゐたと云ふ全く女性とは思はれぬ頑張り様」であったと回想するなど⁷⁶⁾、その他の追悼文章においても、彼女の研究や京城での生活について伝えている。

5章 おわりに

京城帝大の医学部は、1926年までに設置された「内地」帝大の医学部がもつ性格を受け継ぎながら、「内地」の医学生、「外地」の医療従事者たちに新たな研究の場を提供し、学位授与の道を開いた。本稿では京城帝大医化学

講座の初代担任教授であった佐藤剛蔵に注目し、彼が務めていた医化学講座について考察した。なかでも、研究を目的とした人の集まりという側面に注目し、既存の研究で明らかにされている博士学位取得者と専攻生の以外に、佐藤のもとで研究を行なった教室員に重点を置きながら、京城帝大医化学教室のメンバー 25 人について概観した。ただ、中村体制期については、副手以上のメンバーに限定し、彼の下で学位を取得した一部の人間については先行研究に譲った。本論で述べたように、医化学教室では 1931 年以降においても京城帝大ではない他帝大で学位を取得する例も多かった。特に京城帝大が設立される以前から佐藤のもとで研究を行っていた人たちは、ほとんどが「内地」で学位を取得している。一方、1935 年以後の中村体制においては、助手以上のほとんどの教室員が京城帝大出身者で充員された。博士も母校で取得している。

広川その他、佐藤のもとで研究を行った「在来種」たちを京城帝大の医化学教室員としてみられるのかについては議論の余地があるだろう。だが、帝大医学部の教室員の範囲がどこまでなのか、という問題を考える際に、制度上の人事と博士学位授与からのみでは説明できない事例が出てくるのも事実である。例えば、3 章 2 節で取り上げた三谷ひさの場合、博士論文の執筆中に病気で亡くなっているが、彼女の遺稿がその後京城帝大医学部紀要に掲載される。京城帝大の医化学教室員として見做されたからであろう。

一方で、これまで韓国併合期から敗戦期まで韓半島の医育を担った佐藤剛蔵については、京城帝大の医化学講座における活動がほとんど知られてこなかった。そこで本稿では、彼が京城の医化学教室でなした研究を紹介するとともに、彼のもとにあった研究組織が、京城帝大の初期メンバーとそれ以前から彼に指導を受けていたメンバーたちとの混成で成立していたことを指摘し、その特徴を明らかにした。佐藤については、彼のもとで研究を行った教室員を含めて「植民地の栄養化学」という側面からさらに考察する必要があるだろう。これについては次の課題とする。

注

- 1) 植民地朝鮮には高等学校がなかったため、高等教育制度といっても「内地」とは状況が異なる。1940年時点における「内地」と植民地朝鮮における高等教育制度の概要を示しておけば次のとおりである。「内地」では中等教育課程を終えた満16～17歳の男女子が進学する高等教育機関に、官・公・私立の専門学校／女子専、高等学校→帝大（原則的には女子入学不可）、各種大学の予科→大学／女子大、高等師範学校などがあった。一方で、植民地朝鮮では1922年に至って17歳までの就学年齢について「内地」と整合が図られはじめた。朝鮮人が進学する高等教育機関としては、1916年以後に昇格されるか新たに設置された官・公・私立の専門学校／女子専、京城帝大予科→京城帝大があった。「内地」の高等師範学校に当たる師範専門学校は1944年に設置されている。共通する項目である専門学校の数は、「内地」が193校、植民地朝鮮は、官立5校、公立2校、私立8校で全部15校だった。
- 2) 代表的に松田利彦、基盤研究C「日本統治期朝鮮の医療衛生政策と医学者」（2014～2017年度）。
- 3) 代表的に愼着健「フィールドワークと実験室科学の接合——京城における薬理学研究」（『帝国を調べる』勁草書房、2016年。）
- 4) 松田利彦「京城帝国大学の創設」酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014年。
- 5) それぞれ代表的なものを挙げれば、全京秀著、宮原葉子訳「京城帝国大学の学術調査と「京城学派」の誕生——人類学分野にフォーカスを合わせて」（『朝鮮学報』214号、2010年）、逢見憲一「水島治夫らの植民地生命表研究にみる第二次世界大戦前・戦中の医学研究再考」（『日本健康学会誌』86-5、2020年）、松田利彦「志賀潔と植民地朝鮮」（『翰林日本学』25輯、韓国翰林大学校日本学研究所、2014年）など。
- 6) 代表的に鄭駿永「京城帝国大学と植民地ヘゲモニー」（ソウル大学校博士学位論文、2009年）；前掲、松田利彦「京城帝国大学の創設」。
- 7) 代表的なものとして1931年より『朝鮮及満州』に発表された「城大教授物語り」「京城大学論」が挙げられる。
- 8) 代表的に前掲、松田利彦の諸研究。
- 9) 代表的に通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究——日本統治下朝鮮における帝国大学の制度・組織とその展開——」東京大学大学院人文社会科学研究科博士学位論文、2017年、第2部。
- 10) 前掲、松田利彦「京城帝国大学の創設」130頁。
- 11) 通堂あゆみ「京城帝国大学医学部における「医局講座制」の展開」前掲『帝国日本と植民地大学』151頁。
- 12) 佐藤剛蔵『朝鮮教育史』（1956）『外地「いのち」の資料集1・「朝鮮総督府医院年報」附』103頁。

- 13) 例えば、石田純郎「佐藤剛蔵と京城医学専門学校——朝鮮で医学教育に尽した人々(上)」『日本医事新報』4377号、2008年3月。
- 14) 石田純郎「(一般講演)日韓併合中の朝鮮の医育機関での医化学(生化学)者群像」『化学史学会』37巻2号、2010年、59頁。ただし、京城医専は「医化学(講義、実験及演習)」であり、「講座」ではない。
- 15) 前掲、通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究」189頁(北原龍二「医学校教室考(その一)からの引用)。
- 16) 同上、154頁。
- 17) 同上、189頁。
- 18) 同上、第5章を参照。
- 19) 同上、186頁を参照。
- 20) 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編集『京城帝国大学創立五十周年記念誌・紺碧遙かに』1974年、200～201頁。
- 21) 参考までにここでは抜けている2人について追記しておく。まず、石田の論文において小湊潔は、京城医専の佐藤、広川、小湊潔、成田のなかの一人として取り上げられている。石田は、小湊の朝鮮における履歴について「1921-26年京城医専助教授」と記しているが、1923年と1924年に同校の助教授として確認される(1924年度の担当科目:「物理学」、「医化学」)ものの、1925年度と1926年度の職員名簿には名が記されていない。また、平壤医専の方では1926年から1928年まで京城帝大の医化学講座で助手として勤めた成島正と、森田貞士が取り上げられている。森田については「熊本医専卒、1933年、1934年現在、平壤医専調剤学化学教授、熊本医学士」とされる。つげくわえれば、森田は、職員録において1917年度より名前が確認される。彼の朝鮮における履歴をまとめると、1917年から1929年まで12年間、朝鮮総督府医院とその後身である京城帝大附属医院で助手および薬剤手として勤務したのち、1929年から1930年の間に平壤に移っている。1930年から1932年まで平壤道立医院の薬剤官および平壤道立医学講習所の講師として確認され、1933年に平壤道立医学講習所が平壤医専に昇格されると教授に任命された。その後も平壤道立医院の薬剤官と医専教授を兼任しており、職員録では1940年まで名前が確認できる。
- 22) 私立セブランス連合医学校(1909)[←済衆院医学校(1899)]においても医化学分野の研究が行われていた。とくに1914年、R.G.Mills, Van Buskirk, Ludlowなどによって創設された研究部では朝鮮の食物と栄養に関する研究を第一目的とした。本稿では帝大と官立・京城医専を中心にまとめるため、詳細については省くが、セブランスについては延世医学史叢書が現在10巻まで出ていることを参考までに記しておく。
- 23) 隈川宗雄「本邦ニ於ケル医化学沿革ノ梗概」(1912)『日本科学技術史大系』第15巻、1965年、304頁。
- 24) 『東京大学百年史・部局史・2』45～46頁。

- 25) 前掲、佐藤剛蔵『朝鮮医育史』11～14頁。
- 26) 『官報』8301号、1911年2月25日、「医学科学科表」参照。
- 27) 1895～熊本県出身。1917年九州薬学専門学校卒。1921年6月に京城医専の講師として渡韓。同年10月に助教授に、1926年には教授に昇進。1927年12月より京城帝大薬理学講座に移る。以下、人物情報は、『朝鮮人事興信録』（1935年度）『大日本博士録』（該当年度）『批判研究博士人物・医科・続編』（井関九郎著、発展社出版部、1936年）などを参考に作成。
- 28) ユン・チヒョン、1896～1970、咸鏡南道長津郡出身。1918年京城医専卒業後、朝鮮総督府官費留学生として九州帝大医科大学外科学専攻。後藤七郎教授に師事し、附属病院第二外科教室で2年間勤務。1920年5月よりカナダ宣教会城津済東病院外科科長として勤務。同年10月より京城外科病院を経営。1922年5月には私費でドイツのブレスラウ大学（Universität Breslau）に渡り、病理学教室および外科学教室で研究に従事し、1924年に帰国。九州帝大第二外科教室に入り、後藤教授のもとで博士学位を授与される（1924年7月26日付）。1924年4月より京城医専嘱託。
- 29) 新築された医学部1号館には生理学、生化学（医化学が1927年に名称変更）、薬理学、細菌学、衛生学の各教室が入った（前掲『東京大学百年史・部局史・2』20頁）。
- 30) 1888年に帝国大学医科大学の生理学教室主任・大澤謙二のもとで生理学を学び、1889年4月にはストラスブルグ大学のFelix Hoppe-Seylerのもとで留学した。1896年1月より岡山の第三高等学校医学部の生理学・衛生学教授となる。1899年9月、京都帝大に医科大学が設置されると、初代医化学講座担任なり、1903年には学部長を勤めた（『京都大学医学部医化学教室創設百周年記念誌（非売品）』1999年、3頁）。
- 31) 前掲、佐藤剛蔵『朝鮮医育史』95頁。
- 32) 同上、30頁。
- 33) 佐藤剛蔵の学位授与を知らせた『官報』の彙報欄によると、主論文の要旨に「朝鮮人參ノ越幾斯（エキス：筆者注）ヲ製出シ犬及人間ヲ試験動物トシテ新陳代謝試験ヲ行ヒ、窒素、硫黄燐、「カルシウム」「マグネシウム」ノ出納ヲ檢シ同時ニ尿量、尿比重、尿中ノ窒素及硫黄ノ分布ヲ検査シタリ」とある。「参考論文」とあり、総6編の論文名が掲載されている。記しておく〔括弧は筆者による〕。① Über das Verhalten des im Eier klar sowie im Dotter vorhandenen Traubenzucker bei der Bebrütung der Hühnereier. [鶏卵の孵化に際し、卵白と卵黄に存在する葡萄糖の挙動について] ② Über das Verhalten der im Eierklar sowie im Dotter vorhandenen d- Milchsäure bei der Bebrütung der Hühnereier. [鶏卵の孵化に際し、卵白と卵黄に存在する d- 乳酸の挙動について] ③ Über die Purinbasen im Hühnerharn [雌鶏の尿にあるプリン塩基について] ④ Über den Einfluss der Exstirpation der Leber auf die syntheseschen Vorgänge im Tierkörper. [肝臓の切除による動物体の中の合成現象について] ⑤ 朝鮮人ノミヲ収容スル監獄ノ食物ニ就テ⑥ 重金属塩ノ血液残余窒素ニ及ボス影響ニ就テ（『官報』2833

- 号、1922年1月14日、196頁)。
- 34) 論文を提出し博士学位を請求する者は「自著ノ論文」の他に「参考トシテ他ノ論文ヲ附加シテ提出スルコトヲ得」とし、主論文に含まれない参考論文の提出も認められた(「学位令細則」改正、1911.11)。
 - 35) 佐藤剛蔵「食物資源と栄養問題」(『朝鮮』第281号、1938年10月)79～83頁；「朝鮮の食物資源と栄養問題」(『栄養の日本』8-4、1939年4月)31～34頁。
 - 36) 佐藤剛蔵「朝鮮人の主食物に就ての感想」『米之友』4巻11号、1932年11月、23頁。
 - 37) 同上、24頁。
 - 38) 同上、23頁。
 - 39) 前掲『京城医学専門学校紀要・佐藤校長在職二十五周年記念誌』。
 - 40) 前掲『批判研究博士人物・医科・続編』「医化学科」6頁。
 - 41) 「李錫元氏はベルリン大学のローナ教授について医化学を専攻した結果『有機磷とグリゴリーゼとの関係』といふ論文を提出して博士を得、此程平壤水玉里の実兄李錫元氏方に帰省した、朝鮮人でドイツ博士号を貰つたのは氏で四人目である」『京城日報』1927年9月6日朝刊、7面。
 - 42) 『京城帝国大学学報』第2号、1927年5月5日。
 - 43) 京城帝大の人事形態についての「輸入組」と「在来種」という区分は、前掲、鄭根植他五『植民権力斗 近代知識——京城帝国大学研究』325～332頁を参照。
 - 44) 帝国大学官制上、助手をはじめ職員の学歴についての規定はなかった。1893年の「帝国大学官制」以来、諸帝国大学官制では、指揮系統ごとに職員的身分、職務内容、定員が定められた。京城帝大官制では、助手について「第8条 助手ハ各学部ニ分属シ教授又ハ助教ノ指揮ヲ承ケ學術ニ関スル職務ニ服ス」(1926年3月31日勅令46号、1924年5月2日勅令103号官制の改定)と定められている。一方、1926年当時、「内地」の帝大医学部における助手の学歴をみると、少数ではあるものの、非帝大出身者も存在していた。これについては、岩田弘三「大学助手職に関する歴史的研究」(日本教育社会学会『教育社会学研究』56集、1995年)、105頁、表三を参照。
 - 45) 前掲『批判研究博士人物・医科・続編』「内科」330頁。
 - 46) 前掲『京城帝国大学創立五十周年記念誌・紺碧遙かに』202頁。
 - 47) 脚気病論争から栄養化学の歴史については、芦田淳「栄養化学の研究とその将来」『化学と生物』12巻4号、1974年を参照。
 - 48) 代表的に佐藤剛蔵「朝鮮に於ける食物資源と栄養問題」(『糧食研究』155号1939年6月)；「朝鮮の農産食物資源と主食の問題」(『朝鮮』293号、1939年10月)；「科学人の態度」(『朝鮮』313号、1941年6月)を参照。
 - 49) 佐藤剛蔵「食物資源と栄養問題」『朝鮮』281号、1938年10月、78頁。なお、1939年12月に「米穀搗精等制限令(勅令789号)」が出されている。

- 50) 『毎日新報』1939年8月23日朝刊、4面。
- 51) 成田不二生「半島生活と唐辛子」『国民総力』国民総力朝鮮連盟、10月15日号、1943年、16～17頁。
- 52) 「城大だより・地図蒐集家の中村拓教授」『京城日報』1931年5月5日朝刊、6面。なお、2007年、中村が生前集めた古地図は親族によって明治大学に寄贈され、「中村拓文庫」が設けられている。
- 53) 引用文—小早川敬「城大医学部教授評判記(一)」(『朝鮮及満州』359、1937年)を含めて前掲、通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究」192～193頁。
- 54) 中村拓の生い立ちについては、中村士(つこう)「馬骨の生涯:医学者中村拓小伝」梁川町郷土史研究会『郷土やながわ』[1編:17号(2012年5月);2編:18号(2014年6月);3編:19号(2017年3月)]1編を参照。以下、引用の際には編数と頁数を記載する。
- 55) 同上、2編、34頁によると、彼女はもともと東京外国語学校のフランス語教師であったフレデリック・ジャクレーの夫人であり、フレデリックは日本で病死し、その後夫人のジャンヌは日本画修行中だった一人息子ポール・ジャクレーを日本に置いてフランスに帰ったという。この時パリの留学中だった中村がジャンヌとパリの街で偶然と出会い、二人の交際が始まったという。
- 56) 中村弥のインタビューが石田純郎によってなされた。「韓国近代医学教育史——京城帝大医学部、京城医学専門学校で学んだ韓日3名の医学者の証言——」『医学史研究』91号、2009年。
- 57) 前掲、中村士「馬骨の生涯:医学者中村拓小伝」2編、35頁。
- 58) 中村拓、Aspect-véritable de la carence ferrique [鉄欠乏の真相について]、『京城帝国大学医学部紀要』3-2、1932.6.30
- 59) 黒田嘉一郎『研究と教育』株式会社出版、1975年、260頁。同文章は前掲『京城帝国大学創立五十周年記念誌・紺碧遙かに』203頁より掲載されており、本稿では黒田『研究と教育』から引用する。
- 60) 同上。
- 61) 同上、246頁。
- 62) 水島治夫:1896～1975年。水島は1928年1月に京城帝大衛生学・予防医学講座の助教授に赴任し、1940年9月に九州帝大専任[崔義楹論文保留事件により転出]となるまで当講座の担任教授(1935年より教授)を務めた。水島の朝鮮生命表、その後の本島生命表に関する研究については、逢見憲一「水島治夫らの植民地生命表研究にみる第二次世界大戦前・戦中の医学研究再考」(『日本健康学会誌』86-5、2020年)など逢見の一連の研究を参照。
- 63) 『毎日新報』1938年9月17日朝刊、3面。
- 64) 帝国大学官制上「職員」は、総長、教授、助教授、事務官、学生監、司書官、助手、

書記、司書である。

- 65) 永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、2011年、第1章では「緑旗連盟」の創始者としての津田栄の生い立ち、人物関係、経歴が詳細に論じられている。
- 66) 1916年4月、朝鮮総督府専門学校官制により創立。既存の中央試験所を附属機関とし、所長を校長に任じた。1922年に朝鮮総督府諸学校官制により京城高等工業学校に改称される。
- 67) 京城帝大医学部の専攻生制度については通堂の論稿が詳しい。通堂は、京城帝大の専攻生制度が、「内／外地」を問わず、医師免許保有者たちに研究機会を提供する場であったことを指摘し、京城帝大以外での専攻生学位取得状況を明らかにしている（通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究」第6章）
- 68) 「朝鮮派遣歩兵大隊将校職員表並人馬一覧提出ノ件」『大正8乃至同10年朝鮮騒擾事件関係書類』7-1 [韓国史データベース検察]；『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』衛生部、各年度。
- 69) 『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』獣医部、各年度。
- 70) 『京城歯科医学会雑誌』第1巻第1号（1932年12月）から第8巻第4号（1940年12月）まで確認できる岡田正の痕跡を追った。
- 71) 湯川次義『近代日本の女性と大学教育——教育機会開放をめぐる歴史』（不二出版、2003年）など。京城帝大の例については、通堂あゆみ・永島広紀「京城帝国大学で学んだ女子学生」『韓国研究センター年報』九州大学韓国研究センター、2019年を参照。
- 72) 1928年12月13日、朝鮮ホテルで開いた日本小児科学会京城地方会で「城大教授土橋博士、原博士、池田病院長以下左記六氏の研究発表」として三谷ひさの発表が取り上げられている。
- 73) 『朝鮮総督府及所属官署職員録』1933年度、1934年度。
- 74) 三谷ひさ「朝鮮婦人乳汁ノ化学的成分」『児科雑誌』366号、1930年11月。
- 75) 『城大小児科雑誌』7号、1936年3月に収録された「横山生」「矢崎光子」「土橋生」3人の追悼文章を参照（591～594頁）。
- 76) 横山生「三谷さんの憶ひ出」『城大小児科雑誌』7号、1936年3月、591頁。